きたがウーマンリブのスローガンと一蹴されていた。しかし沖縄の無国籍児問題は高度経済成長に酔いしれていた日本人に大きなショックを与え、法改正への大きなうねりの中で「沖縄の無国籍児問題」は女性たちにおみこしとして担ぎだされた。その結果一九八四年に国籍法が父系主義から父母両系血統主義に改正されはじめて国際社会と肩を並べる男女同権国となり一九八五年ようやく女子差別撤廃条約を世界で七二番目に批准締結することができたのである。

この動きの中で混血児、ハーフ、あいの子という言葉が差別語であるとされ「国際児」が使われるようになった。私は個人的に国際児には違和感がある。当時「国際人」とは国際的に活躍するマルチリンガルの人として市民権を得た言葉であった。障がい児は大人になると障がい者と呼ばれるが国際児は国際人になるわけではない。このように国際という言葉は手軽に便宜的に使うのでなく、今一度使う意味と意図をよく吟味することが必要であると考える。

耳からと目からで取入れる外国語の発音などがかなり違ってくるが、耳から英語の方が絶対通じるのである。アメリカ人とつき合っている女性たちは耳から英語が得意である。

「彼はムリン（海兵隊）で。ミシン（マシーン＝バイク）が好き。今日はセックス・オクロック（六時）に会うの」が通じる英語である。マイケルではなくてマイコー、マクドナルドではなくマクダーナルが通じる。中部の基地周辺ではアイス・ワーラーは市民権を得た言葉である。

学校で英語を習ったわれわれは日本語的に英語を読み、カタカナで発音する。英語読みではヘップのピー（P）とバーンのビー（B）が重なってヘッポン、ヘボンとなる。しかし読めるという教養が邪魔をして文字の魔力（スペル）にとらわれてしまったわれわれは耳から英語に抵抗を感じてしまう。英会話における日本のガラパゴス化は今後も続くであろう。

国際とは

毛　利　まさよ

国際とは「国と国との関係、一つの国だけではなくいくつかの国にかかわっていること」と辞書にあり通例、国際連合のように他の語の上につけて用いる。那覇のメインストリートに国際通りという名前がつけられたのは一九五〇年代で平和通りも同じ頃であった。当時中学生であった私はそれらの命名に違和感を感じ、何となく恥ずかしいような気持ちで聞いたとの記憶がある。昨今国際とは身近にあって手軽に使われ少々手垢のついた言葉となっている。

国際結婚という日本語があるためその英訳としてインターナショナル・マリッジが日本で流通する英和辞典などに採用されているが、本来結婚という私的な行為と国際とは結びつかない概念である。オバマ大統領の息子とプーチン大統領の娘が結婚するようなことがあれば、それはまさに国と国との関係に影響を及ぼす国際結婚となるであろうか。国際結婚とは違う国の人との結婚のことと理解されているが、よく考えてみると違いとは何であろうか。国が違えば国籍、人種、言語が違うのが当然と思われてきたが、それは今では通用しない。日本国籍でも顔は日本人らしくない人、日本人の名前で日本語を話せない人、日本人以上に日本語が堪能で日本文化に造詣の深い外国人など珍しくない時代となっている。このような時代に追いついていないわれわれは、未だに明治時代のガイジン（日本人以外の人）のイメージを持ち続けている。

女子差別撤廃条約が国連で採択されたのは一九七九年であるが日本国内で男女差別があり批准できる環境が整っていなかった。日本ではまだ外国人と結婚した日本女性は相手方男性の国籍になるものと旧来の結婚観が支配的であった。そこで脚光を浴びたのが沖縄に存在した無国籍児問題であった。それまでも土井たか子さん等が女性差別の問題を取り上げて

いざよう月ドライブインは丘の上

十六夜の月の中にいて、作者は丘の上のドライブインの前に立って月を眺めているのであろう。作者の立ち位置は丘の下でもなく室内から月を眺めているのではないと思われる。そして月の美しさを詠いたいのではないか。ならばズバリと「十六月や」と強くうち出したい。この句はドライブインが丘の上にあるということを言いたいのではない。たまに来たその丘の上から見事な十六夜の月に出会ったのだ。

（二〇一五年一月号）

パンの耳切り落としたる秋思かな

一読思い切った発想と叙法に惹かれる。パンの耳を切りおとされたような錯覚におそこに秋思を感ずるのだとすれば、おのが耳を切りおとされたような錯覚におそわれているのかも知れない。いったいわが身を切られるような思いとは何であろうか。いずれにしても句の本意を捉えるには容易ではない。どうも俳句の領域ではなさそうな気もする。

（二〇一五年三月号）

ヘボンとヘップバーン

毛利　まさよ

ヘボン式ローマ字で知られるヘボン博士（一八一五～一九一一）は一八五九年（安政六年）にアメリカ長老派教会の宣教師・医師として夫人とともに来日した。その二年後には横浜に施療所を開設し更にその二年後には夫人がヘボン塾を開設して英語を教え始めたが、この塾がフェリス女学院や明治学院大学へとつながっていくのである。夫婦で布教、医療、英語教育に熱心に取り組み、来日七年後にはわが国最初の和英辞典「和英語林集成」の原稿を完了し、明治維新の前年一九六七年上海で印刷し横浜とロンドンで発売された。欧米諸国で日本への関心が高まる中日本語辞書が待望されていた。第二版が一八七二（明治五）年に出版された後、大幅な改訂を加え発音表記にヘボン式ローマ字を当てた第三版が一八八六（明治一九）年東京で出版された。和英語林集成は一八九〇（明治二三）年までに九版を重ねた。

ヘボンは一八八四（明治一七）年新旧約聖書全巻の邦訳を完成、一八八七（明治二〇）年明治学院を創設、自ら生理学、衛生学を教えた。一八九二（明治二五）年帰国、一九〇五（明治三八）年九〇歳の誕生日に日本政府は勲三等旭日章を贈りその功績を讃えた。日本名を美國平文と称した。

オードリー・ヘップバーン（一九二九～一九九三）は誰もが知る米国の映画女優である。実はこの二人には共通点がある。ヘボンとヘップバーンは同じ綴りなのである。昔の人は外国語を耳から取り入れ「この方はヘボン先生です」とされたが、戦後世代は懸命にアメリカ文化を取り入れ英語の文字が読めるようになったため、一九五三年「ローマの休日」でアカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞したのは「オードリー・ヘップ・バーン」となった。ヘボンの日本名に倣ってオードリーを考えてみると「大鳥平文」となるであろうか。

俳句は下手でも句会の雰囲気が好きで勉強になるからだ。俳句は好きかと聞かれれば好きだけど下手としか返しようがない。今後とも続けていくためにはこの機会に自覚を新たにする必要がある、平易な言葉を使い、焦点を一つに絞り、イベントを求めず日常の身の回りにもっと注意を払い、小さな気づきを大切にする。言うは易しく行うは難しである。

合同句集に参加してきたことで生活の記録が残せてよかった。下の子が小学生の時から上の子の巣立ち、家庭内不和、生活苦、別居、母子家庭、離婚とすべてが何らかの形で俳句に表現されている。家庭に問題があっても仕事は一切手を抜けない状況で、行き場の無い心を俳句に吐露していた。「見よ、私は俳句に助けられていろいろな障害を乗り越えてきたのだ」。俳句としての評価はともかく、必死でもがいていた頃の俳句や文章には勢いがあって自分でも驚かされる。良い時もそうでない時も人生をともに歩んできた俳句が、最後にもう少し輝くように努力してゆきたい。

（二〇一三年十二月号）

梅雨明け

毛利　まさよ

梅雨明けてつるり顔出すゆで卵

夜半の月をそっと見送る名残り梅雨

梅雨明けやアフリカマイマイ背伸し

庭師去り見舞に来るは夏の蝶

慰霊の日手に余してや若い記者

立ち雲の裾野ゆっくり到着機

扇風機使い馴らしてペットとなる

切られ髪冷房の風に労わられ

サンダルで疲れた足に高枕

ベッド掠め夜涼一陣駆け抜ける

湯上り女そっと晩涼招き入れ

プリン体糖質ごめんビール旨し

からすみとビールと吾と相和する

ジャズ流れアメリカ世となる夕涼し

うな友と称して誘う夏土用

（二〇一四年九月号）

甘藷嫌い煮ても焼いても戦後の味

一読して実に痛快な一句だ。この句を見て三橋鷹女の〈夏痩せて嫌ひなものは嫌ひなり〉という句を思ひ出した。掲句も日常語を使って実に自由な発想から生まれ自在な読みぶりが新鮮で独自性のあるオリジナルな作品だ。しかしこの句の眼目はその自在さと共に下五の「戦後の味」にある。戦後の飢えを経験したものの本音がこの言葉の裏に潜んでいることである。それは言わざるを得ない思い、言い残しておかねばならなぬ思いなのだ。「戦後の味」という新しい言葉が活かされた。

（二〇一四年三月号）

一句目、アフリカマイマイは、かつては農作物への害などで駆除にてこずっていたが、最近はあまり見かけなくなった。大きな体で、身を伸縮させて違う姿を「背伸する」と捉えたのは、梅雨明けに対する作者の気持ちの投影であろう。湿ったところや雨の日によく見かけるかたつむり類にとって、梅雨明けは、好ましい季節の到来ではないからである。「や」は文語の助詞なので、文語で統一すれば、「背伸す」となる。二句目、沖縄季語の立ち雲は、一般に山並みにたとえて雲の峰ともいわれている。今まさにその山裾を航空機が速度を落としてゆっくりと降りてきた。「ゆっくりと」に無事な着陸を祈る気持ちが込められていよう。三句目、ジャズはアメリカで生まれたポピュラー音楽で、戦後のいわゆるアメリカ世の文化を代表するものの一つである。アメリカ世といってもこの句では、「ジャズ」の流れるアメリカ文化の世を指しているのであろう。「夕涼し」という季語からは、そのようなジャズ音楽に作者は心地よさを感じている。

（二〇一四年十一月号）

ピアス盗る犯人きっと春疾風

着眼点と発想が面白く惹かれる。〈イペー〉の句も面白い。〈イペー咲くかつての米兵歓楽街としてみたが破調になった。

（二〇一四年七月号）

荒妙との四半世紀

毛利　まさよ

通信句会誌荒妙の発刊を以前から沖縄俳句研究会に参加していた妹から聞かされた。句会に出席せずとも郵送で俳句を投句することができるようになったとのこと。俳句は経験が無く自信も無かったが、投句なら人と顔を合わせることもなく、本名を使う必要もないので下手でも恥をかくことはないと全く単純な考えで通信句会に参加した。一般教養として受動的関心の域をでなかった俳句を自分もやってみたいと思った本当の動機は妹の俳句を見て俳句の力に驚かされたからである。日常的に接する妹からは想像もできないようなみずみずしい感性を俳句の中に発見した。これは俳句の力に違いない、自分もそのような力にあずかりたいと思った。

それ以来二十年ほど投句会員を続け、仕事が一段落ついたこの数年句会に参加できるようになった。合同句集は第三集から参加している。年月だけは長いが勉強不足のため荒妙への貢献は会費を払うことくらいである。これまでの人生でどんなことでもある程度やれば人並みにはできると独りよがりに思っていた。しかしその自負は俳句によって打ち砕かれた。何故俳句ができないのか。私は散文的人間なので俳句とは相性が悪い。これまで作文でも翻訳でも読み手にわからせるためにはよく説明することが重要であった。言い切って相手の判断に委ねるなどノーノーである。事物を説明するだけ、叙述するだけ、要素が多すぎる、感動が無いなどなど、言われたときは理解できるがその理解が広がらないのが問題である。

勉強不足はさて置き表現方法として俳句が向いている人もいるでしょうが、私はどうも向いていないのではないかと思うことがある。ではやめたらと言われても私はやめたくない。

の店「サト」で大きい店だからすぐわかると電話は切れた。早速電話帳で里、郷、佐藤、佐渡と調べてみたが見つからない。早めに出て足で探すしかない。やっと見つけた店の名は「察度」であった。

英語を勉強している若い人に注意している事がある。外国人から人名や地名らしき固有名詞を聞かれたときには、聞き覚えが無くともすぐにわかりませんとは言わずにどこの国の言葉ですかと聞き返すことが大切だということである。これは私の若いときの失敗から得た教訓である。あるときアメリカの学生が「コンフユーシャス」について話し始めた。日本人だから当然知っているはずだという態度であった。私はあわてて知らないと話をさえぎった。本当に知らないのかと相手がびっくりしたので、その名前は今初めて聞いたと答えた。帰宅して調べるとそれは何と「孔子」のことであった。相手に孔子も知らないあきれた日本人学生と思われただけなら個人の問題にとどまる。しかし日本の教育はどのようにうつったのだろうか。他国の事は一切教えない鎖国教育が行われてと見なされたのではないか。

中国や韓国の人名、地名を近年まで日本語読みしてきたわれわれは、日本以外で広く通じる英語読みに慣れていかねばならない。「ベイジン」は北京、「ダン・ジャオピン」は鄧小平。コトバは難しい。

（二〇一三年十一月号）

朝顔

毛利　まさよ

朝顔と開店を待つ美容室
ざわめきて行進来るぞと夾竹桃
橋架かり売られゆく島甘蔗終る
基地眼下ゆらり四温の謝苅路
集い来し国際家族春の葬

合同句集の二年はまるで一年のように感じられる。駄句、句の中から数合わせで無理矢理五十句選び提出するとほっとして編集委員任せ、やがて出版祝賀会の知らせが来る。そこで初めて対面する句集は悦さんのすばらしいデザインと装丁、一番先生の立派な題字の本で、自分の句がこの中に入っているのはおこがましくも晴れがましい気分である。馬子にも衣装とはまさにこのことである。

今回の句集第一句「朝顔と開店を待つ美容室」は二〇一二年の沖縄俳句研究会四十周年記念俳句大会応募作品で、一番先生が並選で拾ってくださったものである。間に合わせに急いで出した平易な句が先生のお目に留まったことを教訓として受け止めたい。

（二〇一三年十二月号）

〈特別作品〉より

梅雨明けやアフリカマイマイ背伸する　毛利まさよ
立ち雲の裾野ゆっくり到着機
ジャズ流れアメリカ世となる夕涼し

橋架かり売られゆく島甘蔗終る

直叙的な発想と表現ながら、現代社会を真正面から切り取って鋭い、橋が架ったら島は単なる無価値な荒野ではない。この句の中七、売られゆく土地ではなく、売られゆく島と捉えたところに、作者の社会に対する痛烈な批判の目が向けられている。甘蔗終るも、むしろ島終るという思いにかられてのことか。いつか海洋博会場周辺の土地を手離した農民たちの苦悩を報道した記事を読んだ事があ柳に投影された作者自らの思いも実にたんたんとしていて一つの境地が見えてくる。

（二〇一二年六月号）

啓蟄や徘徊の母追いしこと

この句も作者のやや複雑な心境をサラッと言い放って客観化されて表現されているところが作品として成功していると思われる。晩年にはいってやゝボケが入り徘徊を繰り返していた母への思いを詠んでいるのだが、それがどうしたこうしたとは一切云っていない。ただ「追いしこと」と言っているだけである。俳句の表現としてはそれだけで十分であり、あとは読者の世界。作者は啓蟄の頃になると思うのである。

（二〇一三年七月号）

パリ祭をシャンソン喫茶で祝いしこと

なかなか面白い視点だと思われる。自分に引きつけて〈パリ祭をシャンソン喫茶で祝いおり〉のようにズバリと言い切りたい。

（二〇一四年十一月号）

コトバ雑感

毛利　まさよ

外国人と英語で話しているとき突然日本語が飛び出してくると、不意を突かれてそのコトバを取りこぼしてしまうことがある。自分が英語のアンテナしかあげていなかったことに気づかされる。聞き返せば良いのだがそれがなかなかできない。タイミングを一瞬、二瞬、三瞬と送らせてしまうともう聞けなくなる。後で気がつき正直に告白し謝ることもあれば、わかっていた振りをすることもあり、あるいは最後までわからずじまいで済ませてしまうこともある。

あるとき従軍牧師が英語での話の中で「セイヒン」というコトバを使いその大切さを説明していた。少々違和感はあったが製品の品質や作るときの心構えを話しているものと聞き流し、しばらくしてようやく「清貧」であることに気づいて己を恥じた。清貧は文字としては知っていたが耳から聞くのはそのときがはじめてであった。その牧師から「ニマワシ」会なるものへ誘われた。場所は将校クラブの「セニューノマ」であるという。行ってみてわかったのは会合は「根まわし会」場所は「戦友の間」であった。

「おじいさんとおじさん」「切手と来て」などの発音はかなり日本語の上手な外国人でも難しいようだ。在沖三十年で日本語堪能な女性からランチに誘われた。宜野湾市伊佐の和食

そしていざ養育費を請求する段になると、一応サインはしたが本当に自分の子かどうか疑わしいとDNA鑑定を要求したり、帰国後音信不通となるケースもある。住民登録がない国なので本人が知らせてこない限りどこにいるのかわからないし、プライバシー法により配偶者でない者が他人の個人情報を探しまわることはできない。

米国人父親が認知すれば将来米国籍を取得できるとの理由で認知させる母親もいる。父親が協力すればその可能性はある。子どもは非嫡出子として母親の戸籍に入るので、その後に米国籍を取得すれば日本国籍を喪失することになる。国籍の選択は判断力のついた子ども自身がすべきである。

若い男の子からこんな相談を受けたことがある。戸籍の父親欄に外国人の名前が記載されているが、母親に聞いても何も教えてくれず写真もない。就職の面接で父親のことを聞かれ何も答えられなかった。戸籍を提出するたびに嫌な思いをする。関係ないのについて回る背後霊のようなカタカナの名前を消したい。家庭裁判所に問い合わせたところ認知の取消はできないとのことであった。

日本人にはせめて認知だけでもという根強い認知信仰がある。認知は子どものためと思い込んでいるが実際は、ただの遊びで妊娠したのではないという母親の言い訳も多いのではないだろうか。自分ひとりでも子どもを育てていくと決心して産むのであれば、養育に関わらない人に父親の称号を与える必要はないと思われる。

（二〇一三年二月号）

梅雨つれづれ

毛利　まさよ

梅雨雲に黒幕隠れ右翼湧く
紫陽花と互恵同盟梅雨前線
コンテナ船鉄壁動かす梅雨埠頭
梅雨しきり聞き手の容量越す話
梅雨晴れや郵便受けに振られけり
荒梅雨や鉄塔の信号絶え絶えに
美男子の女踊りや梅雨に咲く
母子喧嘩飛び出してくる梅雨の通路
ペン走る紫陽花葉書に青インク
反芻し違和感吐き出す五月闇
高層に涙の玉抱く桜蘭
電話口梅雨の旅立ちカラカラと
譲られし金時計かざし梅雨に勝つ
梅雨前線島影曳いて離れゆく
台風は国境消して予報地図

（二〇一三年八月号）

わからないがとにかく心配でたまらない。墓がどうなっているのか知りたいと福祉の人に打ち明けたところ、国際福祉相談所なら夫に連がつくかもしれないと教えられてやって来たのだった。

手紙の差出人名と軍郵住所から夫と連絡を取りたいと軍のファミリーサービスセンターに協力を依頼した。間もなく夫はフィリピン勤務中で、再婚して家族四人であることがわかった。ではどのような形で本人に連絡をとるべきか考えた。おばあは娘は夫の側の墓に葬られていると信じている。夫からすれば死亡した前妻の母親とはもう関係がないと思っているかもしれない。おばあの心情を理解できずにケースワーカーからの問い合わせをプライバシーの侵害と拒否するかもしれない。考えた末に夫の部隊担当チャプレンに手紙で事情を説明し、本人から話を聞いてくれるようお願いした。

チャプレンから返事がきた。「再婚した妻との間に女の子ができ一家四人は元気に暮らしている。前妻の遺灰を入れた骨壷は家財道具と共に米軍の貸し倉庫に預けてある。転勤生活なので墓を買う予定はない。本国へ転勤になった時におばあが希望すれば骨を送ることができる。」

おばあに手紙を書いた。「軍の牧師が直接本人から話を聞いた。彼は再婚して家族四人元気に暮らしている。遺骨は彼の両親の住んでいる街近くの墓地に埋葬され、両親が墓参りをして見守っている。墓地のある場所はハリケーンの来る海から離れているので洪水の心配はない。」公然とついたうそに、おばあから墓が大丈夫で安心したとの電話があった。

（二〇一二年五月号）

認知について

毛　利　まさよ

日本では婚姻関係なしに妊娠すると、本人たちの意志に関係なく周囲から結婚への圧力がかかる。てて無し子を恥とする文化が戸籍の父親欄が空白であることを許さないのである。結婚しない、できない場合はせめて認知だけでもということになる。認知届に署名をして提出すれば戸籍に父親の名が記載される。日本人同士であれば必要な時に戸籍や住民登録をたどって父親と連絡をとることができる。また認知は当然ながら養育費請求を念頭においている。

父親が米国人の場合はどうであろうか。米国には戸籍制度も住民登録制度もない。書類上日本の本籍に対応する法定住所（リーガルドミサイル）は固定的な生活の本拠地であるが、その地に不動産などがある場合を除いてほとんどの人が法定住所を本国住所として親の住所などを書いている。本人が署名したことが確認されれば日本では認知届が受理される。本来認知の目的は父親の名が知れることであるからそれは達成されたことになる。

春の暮

毛利　まさよ

幸せかと尋ねる人ある春の暮
鬼あざみ引き際思案の辞令受く
開講の人数足りてでいご咲く
やはた草飛びきて七階花一輪
来年は来ぬ道でいごそっと踏む
月桃咲く子連れ観音いる施設
盆の朝煮つまってくる隣家のごぼう
熱帯夜訳語求めて辞書三つ
夏枯れや愛をください点滴で
抗議きく夾竹桃は基地の中
上布着て基地のパーティ乗り込めり
秋服にカメオの勲章七十路入る
留守番のハッピーバースデイ月と聞く
星月夜画面に初孫上下させ
基地ありてこの子らもありクリスマス

（二〇一二年十二月号）

うそ

毛利　まさよ

もう三十年ほど前、宜野湾市喜友名にあった国際福祉相談所をひとりのおばあが訪ねてきた。糸満のずっと南からバスを乗り継いでやって来たと言う。中部は違いねえと汗をふき、帰りも時間がかかるから急いで話しようねと話し始めた。

おばあは一人暮らしで福祉のお世話になっている。一人いた娘は数年前アメリカ軍人と結婚して渡米、男の子をひとり授かった後突然病死してしまった。立派な制服の軍人に通訳がついてそのことを知らせにきた。軍病院で手を尽くしたが難病で命を助けることはできなかった。夫の希望で火葬された。埋葬は夫の責任で執り行われるので、心配しないでいいと伝えられた。

結婚して男の子をもうけた娘はアメリカでがんばっているものと信じていた。急病死それも難病ではどうしようもないことと受け入れるより他なく、仏壇の遺影に手を合わせて安んずるよう祈っていた。

ところが最近何回か娘の夢を見た。濡れた髪で寂しそうな顔をしていたので気になっていた。そんな時テレビのニュースでアメリカが大きな台風と洪水に襲われたのを知った。もしかしたら娘の墓が流されてしまったのではないか、それで夢枕に立って訴えているのではないか。墓がどこにあるのか

へ他人の子を妊娠した妻がやってきた。カウンセリングの結果生まれてくる子を養子に出して、夫婦は結婚生活をやり直したいということになった。米国の法律では母親の親権放棄申出書および養子縁組承諾書は出産後に作成することになっていた。出産の翌日病院の一室に軍法務官、担当ソーシャルワーカーそして日本の児童福祉・養子縁組機関としての国際福祉相談所担当ワーカーが顔をそろえた。法務官が文書を説明し母親の意志を確認すると、母親が署名、法務官が凸印の公証印を押して終了。母親は即退院し国際福祉相談所がこの公証文書によって子を引き取ってくるのである。

この時までには国際福祉相談所は家庭調査の結果からこの子にもっとも適合する家族を選び出しており、引き取ってきた子はすぐに新しい家族に引き渡すのである。その後は子の発育状況や家族の適応などを観察し、すべて順調であれば家庭裁判所へ養子縁組の申し立てをすることになる。

一ヶ月後筆者は嘉手納の米軍特別調査部から呼び出しを受けた。軍病院から自分の子どもを誘拐した犯人として母親が筆者を訴えたとのこと。これまで何度も経験してきた手順であり、法務官の公証済文書に基づく行為なので心配することはなかった。事情聴取は一回で済んだ。それから一月後今度は宜野湾署から呼び出しを受けた。同じ訴えであった。宜野湾署に行くと母親は廊下の端で筆者の出頭を確認するように見ていた。子どもさえいなければ夫婦は元のさやに納まると思っていたのに、現実はそうはならなかった。異郷の地で子を失い、夫も失った悲しい母親の姿がそこにはあった。

（二〇一一年三月号）

春

毛利　まさよ

春疾風イヤリングなき耳かじる
トイレ神桜の手ぬぐいよろこべり
古民家や左近の桜右近の獅子
渋滞に落日早し花疲れ
春のバス薬袋の乗り降りす
閑居して瘡蓋ゆるむかな
春バザーカレーに集う昔乙女
春の宴静心なく肉旨し
新大橋大根の花見捨てられ
島すみれ一番好きとお金持ち
春休み少年たずねるトイザラス
はにかみて桜をまとうビール缶
蘭の花コーヒーの値を正当化
春に背く手錠の女島ぞうり
春も見ず腰綱握る女看守

（二〇一一年五月号）

もののキャンパスでは学生運動のリーダー達があちこちで一般学生と討論の輪をつくっていた。それを聞いているうちに沖縄から留学生枠で来ている自分は、ここで安保反対の意思表示をしなければならないと思いデモに参加していった。

六月十九日には参議院での議決がなくとも日米安保は自然成立し、その日にアイゼンハワー大統領が訪日する予定であった。しかし学生と労働者のデモは沿道の一般市民の圧倒的支持を得て空前規模の反政府大衆社会運動になっていた。直前に訪日を断念したアイゼンハワーは次の訪問国である韓国に時間の猶予を与えるため急遽嘉手納基地へ飛びそこから車で那覇へ行き、琉球政府で大田主席と会談したが帰りはデモ隊の待つ正面玄関を避け裏口から逃げ出し、那覇基地から韓国へ飛び立った。米国大統領二時間半の沖縄訪問であった。

六月十八日の夕刻私は茗荷谷公園にいた。デモの流れで集まってきた学生達は安保反対の国民運動がこんなに盛り上がっていても、十九日午前零時には自然成立するという現実に無力感を禁じえなかった。私自身は自ら考え行動を起こした、結果はともかくできることはやったとのある種の達成感があり、敗北感はなかった。

こうして私の安保闘争は終わった。二十歳のこの経験は私にとって大きな転機となった。地に足を着けて自ら考え行動し責任を持って生きてゆこう。それには社会の現場に直接関わる仕事がしたいと社会福祉の道を目指すことになった。その原点は六十年安保である。

（二〇一〇年八月号）

乳児誘拐で訴えられた話

毛利　まさよ

一九九八年三月に閉鎖した社会福祉法人国際福祉相談所の業務の範囲には国際養子縁組も入っていた。世間の測に反して混血児だからと子を養子縁組に出す沖縄の母親は非常に少なく、ほとんどの母親は懸命に子育てをしていたのが実情であった。養子縁組ケースは年に二、三件あるかないかで六〇年代、七〇年代は推移し、八〇年代に入るとほとんどなくなっていた。（正式ルートによらない個人間の養子縁組は別である）。

ところが基地内では国際福祉相談所が地域社会唯一の養子縁組機関と認知されていて、軍病院ソーシャルワーク部から妊娠した高校生や女性兵士のケースが紹介されてきた。国際福祉相談所では軍人軍属の扶養家族で米国の社会福祉士で養子縁組家調査有資格者をパートで雇い、依頼者の実費負担で家庭調査を行っていた。その調査は帰国後も有効なうえ、本国より費用も割安なため、沖縄滞在を機に養子縁組家庭調査を依頼する家庭も少なくなかった。

前置きが長くなったが、これは軍病院から協力依頼のあったケースである。一年前から沖縄勤務中の海兵隊員夫のもと

ニュースの時間になってもまだこんなに外は明るいと、慶良間を眺めて日脚の伸びを実感していました。慶良間は季節により時間により天候により、さては見る人の心持ちによっても見え方が変わります。夕暮れの時間の移ろいにつれて慶良間島影が朧になりやがて見えなくなりました。天と海はひとつになり日没の余韻に浸っているようでした。

慶良間を眺める七階に引越してきて数年になります。仕事で忙しかったときは慶良間があそこにあるという地理上の関心しかありませんでした。時間に余裕ができてから一日に何度も飽きずに慶良間を眺めています。首里の実家から見る慶良間は遠くの島々ですが、泊あたりからは沖合いの島々としてぐっと身近に感じられます。

海洋葬の散骨場所は慶良間列島ハテ島近海の海域とのこと、そこでは天も地も生も死も渾然一体に溶け合って地球の悠久の時間に取り込まれてゆくのです。

慶良間は毎日見る現実の風景であると同時に、いつでもどこでも思い浮かべる心象風景になっています。

（毛利まさよ）

（二〇一〇年九月号）

啓蟄や虫にはあらず用もなし

煮つまってくる隣家のごぼう盆の朝

秋服にカメオの勲章七十路入る

この一年はいろいろな区切りの年であった。まず齢七十の大台に乗り、二十歳のときの六〇年安保から半世紀経ち、二十代半ばで共同生活をしたオーストラリア人とインド人のルームメイトと四十五年ぶりにニューヨーク州北部バッファローで再会した。艱難辛苦も年月も人を変えることはなく、二十代の乙女に戻った数日間を楽しんだ。一人旅は五感を刺激し脳を活性化する効果がある。

（二〇一〇年十二月号）

あれから五十年

毛利　まさよ

一九六〇年六月十五日私は国会議事堂前にいた。髪は乱れないように三つ編みにしてしっかり結わえ、丈夫な生地で大きな前ポケットのあるスカートをはいていた。ハンカチ、ちり紙、帰りの電車賃の入ったポケットは大きな安全ピンで上から留め、万が一捕まった時のため身分を示すようなものは一切身につけていなかった。これで両手は自由にスクラムを組むことができた。これが私のデモ参加の基本的いでたちであった。

ジグザグデモをしながら門の方に近づいたとき前方の人垣がくずれて、シュプレヒコールとは異なる怒号飛び交うのが聞こえた。しばらくは動きが止まり押し戻されそうになったが必死にこらえ、やがて少しずつ前進し正門にびっしり立ち並ぶ警察官を横目にデモを続けた。流れ解散して下宿へ帰った後にその日の事件を知った。東大の樺美智子さんが警官隊とのもみ合いで圧迫死したのであった。

五月二十日衆議院で日米安保条約が強行採決されたことで、岸内閣への不信感と日本が米国とともに危ない方向へ引っ張られていくのではないかとの危機感が労働者、学生の間に充満していた。私の学校は全学連反主流派の拠点となっていてその中心には露文、独文、演劇、史学科などの学生がいて文学部の建物はロックアウト状態であった。授業はない

糊がついていて写真を載せてフィルムをかぶせて抑えるだけの便利な時代になったばかりに、自分で写してＤＰＥに持ち込んだ写真は用紙が薄く台紙の糊にべったりではがすことができない。アルバムと共に廃棄するしかなかった。

写真の取捨選択は悩ましい作業であるが誰かに相談したくなる欲求を抑えて、ひとりの人がひとつの基準でやり通すのが望ましい。親亡き後年長の子が家族の歴史と記憶に基づき判断するにあたり、次世代に引き継がせたいものと次世代が引き継ぎたいものとの兼ね合いが難しい。自らの親としての育て方が評価されることになる。「われわれはどこからきたのか、どこへゆくのか」はゴーギャンの命題で終わるわけではない。

はがしと大まかな第一次選別を終え重厚なアルバム七、八十冊を処分した。二、三冊ずつ紐で束ね可燃性ごみとして捨てるには心が痛んだが、置き場所がないのでやむを得ない。今は写真でなくビデオを撮ってパソコンに入れる時代と笑われる。しかし写真の方が額に入れたりピンアップして身近に置き毎日楽しむことができる。機械の中に記憶や思い出を保存する便利さよりも、写真を他の人と共有して楽しむ方が良い。

写真整理は第二次選別に入り思い出を反芻しながら時間のかかる仕事である。来し方を振り返り人生を整理する作業となっている。

（二〇〇九年十月号）

センチメンタルジャーニー

グーグルに検索さるる秋の旅

毛利　まさよ

半世紀巻き戻す旅を月に乞う
雑念を残暑に託し飛び立てり
幾秋ぞ成田闘争ともに老い
秋日浴び尾翼を競う国際機
ツツガムシつかぬを願いとろろそば
バファロー大手を広げ北の秋
日豪印むかし娘の秋日和
エリー湖の風に秋あり金蓮花
伸ばしたる記憶のひだの秋思かな
秋高し学者夫婦の大楓
博士号脱ぎて素足に草紅葉
秋弾み器華やぐレディスティー
水煙秋天に映えナイヤガラ
大瀑布歳月消えて今の秋

（二〇一〇年八月号）

慶良間消え天海溶け合う遅日かな

まさよ

数の子は親の味して寂しかり

まさよ

戦後の沖縄は米軍施政権下で特殊な地位に置かれ、軍票、日本円、ドルと流通貨幣も変わっていった。一九五〇年代には日琉貿易で本土から食料品、日用品が入ってくるようになった。どのような経緯かは知らないが、正月前になると我が家には塩漬けの数の子が大量にあった。井戸端の大きなたらいで塩抜きするのが私の役目であった。弾力性のある黄金色の数の子のプチプチした手触りは心地よかった。数の子は花かつおと醤油でいただくのが良く、昨今出回っている味付け数の子では本来の味が活かされていない。

正月には多くの客に対応するため、外に石油コンロを並べてやかんで日本酒を燗していた。父は一日中座って楽しそうに座を統べ、母は目の回る忙しさの中で客を歓待していた。その間にも母は子どもたちの頼みに応じて晴れ着を着せたり脱がせたり、小言ひとつ言わずやってくれた。

数の子は戦後の正月の記憶を通して、父と母の思い出につながっている。あの頃の数の子は新鮮でおいしかった。長じては数の子で父と熱燗を楽しんだ。母がさっと炙って出してくれるからすみも絶品であった。世界で最もおいしい食べ物は数の子とからすみであると信じている。

（毛利まさよ）

（二〇〇九年七月号）

写真雑感

毛利　まさよ

実家の立て替えにあたり、親の時代からの膨大な量の写真の取捨選択と整理の役目が長女に回ってきた。引越し荷物の箱が一五個玄関から並べ置かれ、コープの配達人は夜逃げされないかと心配額であった。手をつける方策も意欲もなく数ヶ月蟹の横這いで生活していたが、時間が解決しないものは自ら征服する他ないと意を決して箱の山にアタックを開始した。

ひとつの箱に数冊のアルバムと袋にまとめられた写真が入っていた。豪華なアルバムは重量が三キロあろうかという重さに加えてサイズが規格外で、どの棚にも本箱にも収まるしろものではなかった。そこで写真をアルバムからはがし、保存するものと廃棄するものに分けることからはじめたが、はがしは困難をきわめた。

戦前写真館で撮られたものは写真そのものがしっかりしているうえに、映画のスチール写真のように美しいポーズと表情が生き生きしている。黒い台紙にコーナーで固定され黄変や痛みが少なく昭和初期の写真技術の高さに驚かされる。

戦後の白黒スナップ写真も比較的に痛みや変質は少ない。カラーの時代に入るとたんに変色劣化が進んでくるのは現像紙や薬剤の質の問題であろう。おまけにアルバムの台紙に

木を見つけることである。納得出来る表現、訳語との出会いのよろこびを求めて更に森の奥へと入って行く。

アメリカでの話、遺棄された子を生後三日目から育てた養父母のところへ、三年後突然実父母が現れ子どもの引渡を要求、全米注視のうちに事件は州の最高裁までゆき、ついに実親へ引き渡せとの判決がでた。子どもを引き取りにきた実親の車を沢山の人が取り囲み、口々に怒りの言葉を投げかけた。そのなかに「モンスター」があった。これを翻訳させたところ「怪物」、「怪獣」、「化け物」とだしてきた。日本人として再考するよう促すと「鬼」がでて、やっと「人でなし」を引き出すことができた。翻訳は無感覚な転換作業であってはならない。

谷崎、三島、川端など日本文学の英訳出版で知られるアメリカのクノップフ社の編集長が語ったと伝えられていることがある。「アメリカの読者は翻訳された英文が読みにくいと本を捨ててしまうが、日本人は翻訳された日本語が読みにくくとも忍耐強く読んでくれるので羨ましい」。それを聞いた人が「確かに日本人はかなり我慢強く、わけのわからない翻訳調日本語を読まされてきた。わからないときには原文が高級なために翻訳文も難解なのだろうと、自分の頭のレベルの低さを嘆いた」と語ったとのことである。もうつまらない見栄をはる時代ではない。言葉に対するセンスを磨こう。

（二〇〇八年五月号）

チューリップ

毛利　まさよ

卒園式児童福祉法に決別す
寄る辺なき子らの旅立ち戻り寒
勲章は最終講のチューリップ
チューリップ傾ぎて開く胸の内
寄せ書の色紙残して春過ぎる
タクシーにキャリア詰め込み春終わる
留守電の声の成長つつじ咲く
春嵐難民のごとバスを待つ
春の月おぼろに甘し黒糖あめ
花固き貞女はひそと桜蘭
受信トレイまたチェックする春の夜半
何事もなき春の日の空思案
春一日声なく終りワイン注ぐ
葉桜に鏡の肌を隠さずに
春個展添え書うれし案内状

（二〇〇九年五月号）

朝の七時だ、
丘の斜面が露に濡れ、
雲雀は高く飛び、
蝸牛は茨に這っている。
神は天に在り―
世はなべて穏やかに

どちらが好きかは個々の判断である。

翻訳者はすぐれた職人のように熟練を積み、原作という設計図を過不足なく忠実に再現することを心掛ければならないと言われている。大変難しい仕事であるが、適語を求めて辞書や情報の山にわけ入り、それを見つけ出すよろこびは格別である。

（二〇〇七年十月号）

通訳・翻訳雑感Ⅱ

毛利　まさよ

翻訳の「翻」はひるがえる、ひっくりかえるの意味で、英文和訳に比べて翻訳にはダイナミックで動的な意味が加わる。翻訳や通訳はアクロバティックメンタリティ（曲芸的知力）であると言う人もいる。英文和訳ではグッドモーニングを「良い朝」にしても大目に見てもらえることがあるかも知れないが、翻訳では「おはよう」という日本人の挨拶でなければならない。翻訳は字句だけでなく言語の背景にあるそれぞれの国の文化、生活、歴史、価値観を含めて伝える知的な作業なのである。

翻訳というと直訳か意訳かの話がでてくるが、その範囲も意味もあいまいで、どれがより良いかの問題ではない。辞書に必要なだけの直訳は危険であるが、よく見受けられる。「翻訳の文章は読みにくく、わかりづらいが仕方のないこと」と諦めている人が多い。訳文を読んでいると英語原文の単語や言い回しがオーバーラップして浮かび上がってくることがある。原文に捕らわれるのは当然ではあるが、辞書で調べて読み込んで文章を十分に理解した時点で英語から離れ、これをどう日本語で表現するかに軸足を移すべきである。日本語として違和感なく、すらすら読める翻訳を目指したい。

翻訳の醍醐味は言葉の森に分け入ってこれと思う枝振りの

通訳・翻訳雑感Ⅰ

毛利　まさよ

翻訳と通訳は似て非なるものである。どちらも必要な資質はまず教養そして常識、最後に語学力、そして専門知識である。英語から日本語への翻訳、通訳では日本語で蓄積した生来の教養に後で知識として学んだ英語文化圏の教養をいくらかプラスし、日本語の新聞、テレビの論説や時事問題に関心を持ち、普通の文章を読んで聞いてわかる程度の英語力のあることが基本である。自分がわかるだけではゼロでその数字を上げてゆくには翻訳や通訳で相手側の言葉に変えて発信してゆかなければならない。

翻訳、通訳で最終的に求められるのは英語から日本語では日本語の能力である。レストランの訳語はレストラン、食堂、料理屋、一膳飯家、屋台などいろいろある。これらの訳語は日本人にとって異なった意味あいや雰囲気を持っている。ですからどの語を選ぶか吟味するために教養が大切なのです。

訳語は時代によっても変わってきます。その時代にマッチする言葉が求められるからです。シェイクスピアのハムレットの中の有名なセリフ（原文省略）の訳を年代順に見てみよう。

一　あります、ありません、あれはなんですか。（明治七年）

二　死ぬのが増（まし）か生くるが増か、思案をするはここぞかし（明治十五年　外山正一訳）

三　存ふる？　在へぬ？　それが疑問じゃ（明治四二年　坪内逍遙訳）

四　世に在る、世に在らぬ、それが疑問じゃ（昭和八年　坪内逍遙訳）

五　生きる、死ぬ、それが問題だ。（昭和二年　三神訳）

六　生か死か、それが疑問だ。（昭和三四年　福田恆存訳）

七　このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ。（昭和四八年　小田島訳）

日本人が誰でも知っているブラウニングの時（原文省略）の翻訳を見てみよう。

（上田敏　訳）

時は春、
日は朝、
朝は七時、
片岡に露みちて
揚雲雀なのりいて
蝸牛枝に這ひ
神そらに知ろしめす。
すべて世は事も無し。

（吉武芳孝　試訳）

季節は春、
そして今は朝、

少年の夏閉じ込めて鑑別所

通訳の仕事で普通の人のあまり行かないところへ行くことがある。今回は検察官が鑑別所にいる少年に今後の手続きを説明し、弁解を聞くのに同行した。鑑別所は波の上の一等地に以前からあり、リゾート施設があってしかるべき環境にある。しかしその環境を楽しむことのできない閉鎖施設なのである。

少年の名前を見た。全くの日本人名で日本国籍である。「外国人ではないのですね。」「ハーフで日常会話は大丈夫ですが、難しい言葉はわからない可能性がありますので。」白い無機質な部屋で少年を待った。

やがて目もと涼しいハンサムな少年が入口に現れ、名を名乗り礼儀正しく席についた。はきはきと受け答えし通訳の必要はほとんどなかった。他のグループからけんかを売られたので仲間を守ろうと戦った。親の離婚によって母親と共にアメリカから帰ってきたのは中学生の時、日本の学校にはなじめず、インターナショナル・スクールの授業料も払えなかった。

繁華街を徘徊するうちに類は友を呼び、やがてグループのリーダーに押し上げられた。自分たちの居場所と仲間を守るために毎日が真剣勝負であるが、今回は傷害事件になってしまった。

白い壁に囲まれて少年が自分に向かい合うとき、アメリカ、沖縄、父、母との回線はどのように繋がっているのだろうか。この少年を傷害事件へ追い込んだものは回路の不具合か、接触不良か。

（毛利まさよ）

（二〇〇八年二月号）

秋澄むや婚整いて親終える

まさよ

「授かりてプールに弾ける忘りんぐわ」であった息子が結婚すると言ったとき、まだ若いのだからもっと独身生活を楽しめば良いのにと思いました。手抜き育児を逆手にとって独立心の強い子に育った息子は十八歳で自立の旅に出たのでした。

「集立つ子の銀の翼は真南風天」

異国でのひとり暮らし十年、親としては電話や手紙で元気を確かめるだけで安心していましたが本人の立場に立って考えてみると、嬉しいときも辛いときもそれを分かちあえるパートナーがいた方が心豊かに潤いのある生活ができるわけです。相手は幸いにも沖縄の娘さんでした。息子の希望は将来は沖縄に住みたいが若いうちはアメリカで仕事を続けたいとのことでした。

娘を持つ親は遠くへ嫁がせたくないというのが本音だと思います。ましてや異国に住むことには当然大きな不安があります。それを解きほぐし結婚の許可を頂くにはどうしたら良いのでしょう。ご両親にどのように話したらよいか息子とふたりで作戦を練りました。そして息子の熱意が通じ結婚を許していただきました。

「生き知らせ菊に託して墓参り」

本人たちの企画による披露パーティーは太平洋を見下ろす丘の上の素敵なレストランで手作りの暖かさに包まれて行われました。

ふたりの旅立ちを見送ってまた元のひとりの生活に戻った時、もう人生でやり残したことは何もないと実感しました。

（毛利まさよ）

（二〇〇八年四月号）

春いろいろ

毛利　まさよ

春陽背に宇治金時と小さき老人
春雨に濡れずに行こう老いの伊達
咳鎮め痰をぬぐいて春の闇
春女パンツスーツで風を切る
年忌祭済ませて送る春重し
バス飛ばし春闘蹴散らす運転手
春法事姉妹久しく記念写真
子の心知りて詮きニ月風廻り
啓蟄や芽の出ぬプランター水をやる
雪どけて薄日呼びくる春の子ら
少年は検事と握手春終る
慶良間消え突堤踏ん張るニ月風廻り
松の花児童園への道標
幸薄き子らの合格神おわす
嬉しさのしたたる苺合格祝

（二〇〇七年五月号）

孤児たちもどこかへ帰省年の暮れ　まさよ

ある児童養護施設で園児の面接員をしている。数人いる面接員はそれぞれの専門性や経歴に応じて四、五人の園児を担当し、週一回夕食後に面談する。施設職員や学校教師以外の大人に接する機会が少なく、自分だけの身内の大人が身近にいない園児にとって面接員は社会との接点の役目も果たす。

幼くして世間の常識を越える辛い体験を重ねた末にようやくたどりついた児童園は、安心で安全な生活を提供してくれる場所であるが、衣食住が足りればよいということにはならない。ひとりびとりの子どもの思いを受け止め共感し、児童福祉法の保護を離れる十八歳に備えて現実的な自立の方向を共に語り合う大人の存在が必要とされる。

十二月に入り子どもたちの正月帰省に向けて職員が連絡調整に動いていた。園児五十人全員に『家庭で正月』を過ごして欲しいとのこと。世間一般が考える『家族』がない、もしくは機能しないために施設に預けられた子はどこに帰省したのであろうか。

年が明けてから聞いてみた。異母姉のところへ行った子、母の再婚先へ行った子、自分の子と認めず追い出した父方の祖父母のところへ行った子、全く係累の無い子は一時里親やアメリカ人ボランティアの家庭で正月を過ごした。受け入れる側にもいろいろ事情があり、子どもたちも気をつかうことがあったに違いないが、ともかく全員帰省できてよかったと思う。

（毛利まさよ）

（二〇〇七年六月号）

私の福地ダム物語

毛利　まさよ

福地ダムは琉球列島米国民政府管轄の琉球水道公社が慢性的な水不足解消のために企画し、米国陸軍工兵隊（ＤＥディストリクト・エンジニア）によって一九六九年七月に着工された。復帰までに堤体工事を完成して日本側へ引渡される予定であったが台風などで遅れ、工事中途で日本へ引き渡されることになった。

米国式基準、仕様で設計された施工途中のダムを引き取って日本式基準で完成させるには、単にフィートからメートルへの変換以上に多くの困難をともなった。米国から日本へ技術基準の違いを乗り越え、ダム建設史上極めて異例の経緯を経て福地ダムは一九七四年十二月に完成した。

さて私と福地ダムとの出会いは復帰直前のＤＥ、水道公社から日本側への事務引き継ぎ式に急遽通訳として呼ばれたことであった。

短い挨拶と形式的セレモニーであろうと引き受けたのが大間違い、式の中心は工事関係書類の引き渡しであった。テーブルの上に積み上げられた書類を一冊づつタイトルを読んで日本側へ手渡してゆくもので、専門用語で双方ともわかっているので通訳は必要ないと言われ助かったが、知らぬは通訳のみの場面であった。

式の前後の話し合いに少々通訳をした位で大して役に立たなかったとの思いから、この出来事は頭の片隅に追いやり、思い出すこともなかった。

それから二十年後、突然総合事務局河川課から電話がかかってきた。福地ダム日米承継二十周年記念式典への招待であった。北部ダム事務所初代所長で継承の実務に携わった山住氏らが、あの事務引き継ぎ式に立会った通訳を覚えていて捜して下さったのである。役立たずの通訳でも当時の関係者にとってはなつかしい思い出の一コマに記憶されていたのである。こうして私は思いがけずもそうそうたる招待客の末席に連なることとなった。

一九九二年十一月二十五日秋晴れの福地ダムサイトで記念式典が催された。ハイライトは福地ダム日米承継記念碑の除幕式で、日米両語の碑文には幾多の困難を乗り越えて、沖縄の水がめをつくりあげた人々の誇りと熱意が込められている。

ＤＥ時代からの沖縄人技術者、建設省の事務方、専門官らこのダムの承継から建設に係わった人々の思い入れを実感した式典であった。

（二〇〇七年一月号）

切って小さな努力を重ねることはやはり大切なことである。

（二〇〇六年四月号）

梅雨模様

毛利　まさよ

梅雨入りの兆しに急ぎ陶芸展
カーテンを揺らし駆け抜け走り梅雨
買い物は小銭で済ませ迎え梅雨
言い訳を梅雨に吹かれて乱れ髪
梅雨入りの切抜き入れてエアメール
梅雨と雨期訳語の違いを辞書知らず
岩陰に月桃の花乙女肌
花月桃昔子を連れ訪ねし家
母の日や花の贈り手子らの父
母の日のカードに恥じる無為の日々
母の日は古き写真に語りかけ
復帰の日の基地に伸びゆくハイライズ
移設先無きを知らずや夾竹桃
清貧を秘めたる固さ桜蘭
桜蘭格子をつかみ咲く葉陰

（二〇〇六年七月号）

電話きて母の日ようやく終りけり

毛利まさよ

平易な日常の言葉で綴られているだけに、ストレートに伝わるものがあり、共感を呼ぶ句です。

今日は母の日。せめて電話だけでもと思い、今か今かと待ち続けているのだが、なかなか掛ってこない。夜遅く「ようやく」電話がきて、あっやっぱり忘れられてはいなかったのだと安堵して一日を終えたというのである。子を思う母親の心と、母の労を労う子の姿が浮んでくる佳句である。

（芳澤史子）

（二〇〇六年九月号）

電話きて母の日ようやく終わりけり

まさよ

母の日の前にはカードが来る。アメリカはカード文化の国、あらゆる機会に対応する多種類のカードがある。材質が良くデザイン、色彩も美しい。そのうえに印刷されている言葉や文章、引用に含蓄があり心の琴線に触れるものが多いので、まさにもらって嬉しいのがカードである。その言葉を選んだ息子の言葉として英語のニュアンスで読む。翻訳するとニュアンスが崩れる。言語によるコミュニケイションを旨とする欧米語と、非言語の気づきや以心伝心を重視する日本語の違いである。

仕事や時差の関係もあるから母の日の電話はいいよと言いながら、その日はやはり電話を待つ。一日が終わろうとする時間になってもまだひとりから電話がない。向こうは前日だから電話は明日かもしれない、などと自分に言い聞かせていると電話が鳴った。そして母の日の長い一日は何やら心地よい待ち疲れとともにようやく終わったのである。

こんな平易な句ですが鑑賞して下さった芳澤さんに感謝いたします。

（毛利まさよ）

（二〇〇六年十一月号）

ラスベガス雑感

毛利　まさよ

クールビズウォームビズと日本では政府の音頭取りで冷暖房の温度を二℃、三度上下させることに官民一体となって取り組んでいる。背広制服族が派手だ、軽いと抵抗したかりゆしウェアも、着心地の良さから受け入れられてきており、地場産業の発展につながっている。日本人はもともと節約、倹約を美徳としてきたから、温室効果ガスの排出量削減にコンセンサスが得られやすい。

地球温暖化防止の京都議定書から温室効果ガス排出量世界一のアメリカが二〇〇一年に離脱した時には、その身勝手さに憤りを覚えた。排出量を規制すればアメリカ経済の発展が損なわれる恐れがあるというのが離脱の理由であった。世界のリーダーを自認しながら何と無責任な言い分であろうか。排出量第二位の中国は議定書を批准はしているが、発展途上国に分類されるので削減義務はないとのこと。何という不公平さ。ずっと釈然としない気持ちであった。

ところが最近ラスベガスに行く機会がありこの問題を間近に感じた。不毛の大地につくられた人工都市、巨大な大人の遊園地、眠らない街、浪費を美徳と思わせる街などいくら形容詞を使っても表現しきれない不思議な都市で、異次元に迷い込んだような錯覚を覚えた。その中で一つだけはっきりとわかったことがあった。なぜアメリカが京都議定書から離脱したか、その理由が一目瞭然であった。

この夢のような街はカリフォルニアやグランドキャニオンから大量の水を引いてつくられている。ホテルの前の大規模な噴水は富が自然に勝利したことを誇っている。どこへ行くにもスロットマシンの間を通ってしか行けないようになっている。一セントのマシンからありトイレの帰りや空港での待ち時間もちょっと遊ぶ仕掛けになっている。

カードゲームの四角いテーブルやルーレット台などが一面に並び、蝶ネクタイが制服のディーラーにはあらゆる人種の老若男女を取り揃えており二四時間待機している。中年日本人らしい女性ディーラーを見るとちょっと寄ってみたくなる。孫のいそうな女性を見るとおばあちゃんの仕事をどう説明しているのか気になる。奥のほうには最初千ドルから始まる高額ゲーム室が見える。見えないところで常時何億もの金が動いているらしい。

朝もなく夜もなく電力をここでもかと使って人を誘い込むゲームの世界、現実社会で疲れた人たちが束の間の非日常を楽しむ癒しの効果、そして多くの雇用機会の創出がある。そこでは規制、制限、削減、節約、倹約などの言葉は意味を持たない。その現実を肯定するわけではないが、否定もできない。

それでも沖縄で冷房の温度を上げたり、こまめに電気を

春嵐

毛利　まさよ

春嵐黒百合長官降り立ちぬ
春暁よ今日は起きずによき日かや
ネオン消えインベイダーの春の闇
春荒れや慶良間の前に白くじら
ハグをして春のスカーフ舞落ちる
ボストンより時を越え来て鍋つつく
恩しゅうの峠に迷う車輪梅
行革のしわ寄せじわり車輪梅
「春闘」はカッコの中よ嘱託員
やせ枯れてなお戻り来る寒あわれ
花衣風に逆らい坂上る
春陽満つ七階わが家に凱旋す
春疾風国保受給の身に寒し
胡蝶らん次男の縁談運び来る
大橋を出てゆく船よ春迎え

（二〇〇五年五月号）

開講の人数足りてでいご咲く

まさよ

語学センターの翻訳者養成基礎講座で英語から日本語を担当して十年になる。六ヵ月コースで四月と十月に開講するが地味なコースなので開講に必要な十人程度が集まるかどうかは直前までわからない。受講者のバックグランドやリピーターの有無によって教材の選択に変化をつける必要がある。週一回夜二時間のクラスのために当日は一日中準備にあてるので、開講が決まるまでは他のスケジュールは立てられない。十四～五人で始まっても六ヵ月後まで残るのは五～六人である。

今年は異常気象続きで季節が来てもでいごの花はほとんど見かけず諦めかけていた。四月半ば開講の知らせを受けバスに乗ると窓外にちらほらでいごの花、久茂地川沿いであった。例年のような見事さはないが過酷な環境に耐えてよく咲いてくれたと、労いたくなるような楚々とした花であった。

受講者の中には海外でシニアボランティアを経験した七十三歳の女性、定年退職してゴルフ三昧の日々に一本筋を通したいという男性など年齢もバックラウンドも雑多である。そこに翻訳の面白みが出てくる。言葉への感性は個々の人生の取り組み方によって磨かれる。自分の感覚に合わず使うのを避けたい言葉もある。翻訳とは言葉の違いを越えて文化、価値観、生活習慣の相互理解を手伝う仕事である。（毛利まさよ）

（二〇〇五年十月号）

のひとりとしてほぞをかむしかない。科学技術の専門家とわれわれ一般人との間にはほとんど接点はないであろう。

平和学や異文化理解学の大学院であったらどうであろうか。沖縄の研究者や一般人も講演会やシンポジウムに参加できるのではないか。沖縄戦や戦後の米軍統治の再検証が行われるのではないか。地域社会を巻き込んだ研究やフィールドワークが行われるのではないか。アジアにおける平和学、紛争解決学の拠点になれるのではないか。

沖縄科学技術大学院大学設立によって沖縄に新しいハイソサイエティが形成されると予測している。大学院の教授陣、外務省沖縄事務所高官、アメリカ総領事館、在沖米軍首脳、それを取巻くバイリンガルの大学教官、弁護士、経済人等々である。

国が作るといっても財源はわれわれの税金なのでノーベル賞学者をわれわれが雇っていることになる。

以前国際都市形成構想が打ち出されたが、その考えにそって国連などの事務所や研究機関インターナショナルスクールなどを誘致し多様な文化、言語を受容することが必要である。国際会議レベルの日英同時通訳者養成講座がオーストラリアの大学院にある。沖縄にぜひ欲しい。科学技術も大切だが沖縄の地域社会に密着した人文科学の研究にもわれわれの税金を投入してもらいたい。

（二〇〇四年夏号）

巻頭特別作品

鬼あざみ引き際思案の辞令受く

夏前期

毛利　まさよ

七階に南風を招きてバッハ聴く
領事館芝を賑わせかりゆしウェア
日米の狭間に揺れて夾竹桃
ゴーヤーの彩るフランス料理かな
ドック終えビール通す五臓六腑
バスは来ずパラソル灼けて地に潜る
夏雲にまどろむフェリー泊大橋
父の声しっかり閉じ込め桐枕
僧むせる扇風機の風十三忌
帰り来て西日の床に白髪かな

自分の句が巻頭に選ばれるとは晴天の霹靂以上にあり得ないことであった。選句集計のころ沖縄は一三〇年来という大雨を経験していた。普通ならあり得ることが起こった証で驚愕したに相違ない。私の句に心情的共感をお寄せ下さった荒妙会員に感謝したい。

私の句は報告、説明に終始し自然をよく観ていない。課題を重く受け止めて励みたい。

（二〇〇五年九月号）

が実家に集う。仏壇の前に孫までみんな揃ってそれぞれお線香をあげる。私はハワイにいる息子たちとお嫁さんの分もあげる。妹は千葉にいる末の妹の分をあげる。そして声に出して仏壇に近況を報告し、「英検がんばりますので、良い結果が出るよう見守って下さい。」「ハワイのプロジェクトが順調に進むようお護り下さい。」など家族のなかのチャレンジをみんなで共有する。個人的なことは声には出さず遺影を見ながらそれぞれに父や母と対話するのである。

お供えした冬瓜汁のウサンデーをいただきながら大人の席は寡黙になってゆく。昆布とお肉の個性を上手に引き出し自己主張しない冬瓜は母そのものである。脇役のつもりでいても冬瓜はちゃんと主役にされている。父が好み、それを知る人達が重さも厭わず持ってきてくれた冬瓜は軒下に並んで食べられる順番を待っていた。「お父さんに食べさせて」といろんなものを持ってきてくれた人たち、喜んで食べていたと後で報告するととても嬉しそうにしていた人たち、そんな人たちはもう私の周囲にはいない。

ハワイに住む子どもたちは帰ってくると「シブイ（冬瓜）のおつゆ」を食べさせてもらいに祖父母の家に行く。実家を守る嫁は家の味をしっかり受け継いでいる。冬瓜汁は父母の味、実家の味である。（毛利まさよ）

（二〇〇四年四月号）

大学院大学について

毛利　まさよ

荒妙に書くにはあまり適当でないと思いますが、ずっと引っ掛かっていることなので書かせていただきます。

沖縄に大学院大学をつくる構想が打ち出されたとき、たとえそれが米軍基地県内移設への政府からのアメであっても、高等教育機関が出来ることは良いことであると思った。内容については理系の科学技術ではなく人文科学系が沖縄に必要であると思っていた。珊瑚礁や亜熱帯医学の研究などは琉大はじめ国内の大学が既に実績をあげている。ではその他に沖縄にとって必要な研究分野は何か。

一市民として素人の立場から見ると今沖縄に必要とされる研究分野は平和学、紛争解決学、異文化コミュニケーション・カウンセリング学、国際私法・身分法学、フェミニズム法学、家族社会学、国際福祉学、国際教育学、民族芸能学、音楽などであろう。このような研究分野や学があるのかどうかもわからないが思いつくままに列挙してみた。

政府から降ってきたプロジェクトについて受入れ側の具体的議論もないままに自治体による誘致合戦が先行した。政府が作ってくれるのだから貰っておけば良いではないか。ノーベル賞を受賞した偉い先生が来るのは良いことだという安易な受け身の考え方である。何の議論も提言もしなかった県民

例四「旧正月の日知人に会ったら子どもにお年玉をくれた。向こうも子どもがいるのでお年玉を届けるべきか。」（地域の人に聞いて下さい。）

例五「女の子ばかり三人生んだ。夫は退職したら離婚して親の家に帰り、親の墓に入ると言う。男の子がいないわたしの面倒は誰がみてくれるか。入る墓もない。」（金がなくとも生活保護が受けられるし老人ホームにも入れる。ホームヘルパーや介護士もいる。遺骨は寺に預け供養してもらえる。個人が努力しても出来ないことは基本的に国が面倒をみてくれる。）

例六「夫は退職金を分けてくれない。夫は米、味噌、梅干、石鹸代を生活費として渡すだけで、自分の年金を自由に使っている。わたしの年金は少ないのでいつも足りない。女性センターから夫に話をしてもっと金を渡すよう説得して欲しい。」（退職金は働いた本人のものです。生活費の額については夫婦間で話し合う問題です。）

例七「帝王切開で縦に切って欲しいと看護婦に言ってあったのに、横に切られた。損害賠償を請求したい。」（子どもは「無事」（横に切られたことでの不都合は？）「目立つじゃないですか」（担当の医者と話し合い納得できなければ、県医師会医療相談室へ申立を。）

皆さまお困りのことがあれば気軽に相談室へお電話下さい。

（嘱託相談員）

（二〇〇三年九月号）

秋一日

毛利　まさよ

朝刊を読んでから寝る長き夜
バス待ちつ読書楽しむ秋一日
再決断銀行変えて秋の街
出張のうまみ広がるかきうどん
背を伸ばし上昇の意思秋天へ
搭乗口継目に秋の潜み居り
紅葉旅帰り迎える蘭うれし
早慶戦遠き昔の外苑落葉
要不要半々となる夏服しまい
去りし人幸せなりやと月に問う
音もなく船の過ぎゆく秋ベランダ
捨て鉢に緑芽吹きて秋やさし
新涼やバリウムの胃のたうちて
残り火を惜しむ気もなきブーゲンビリア
カンナ枯れ秋を失う戸惑いや

（二〇〇四年一月号）

命日や言葉は要らぬ冬瓜汁

まさよ

命日には母が好きだった和菓子や果物を持ってきょうだい

ゴーヤーが食べられるよとバイト終え
熱帯夜信頼してると言う子あり
巣立つ子の銀の翼は真南風天
兄おとと寿司酢を飛ばす捨て団扇
国籍の選択思案夜長母
留守電のハッピーバースデイ月と聴く
別れ寒息子の毛布に包まれる
聖金曜日ニューヨークへの赤き糸
夏負けと細りし心に衣着せ
夏枯れや愛を下さい点滴で
青い鳥追いゆく夫追う夕立
大花火修羅の爪あと血のしぶき
夫待つ下弦の月と歯のうずさ
長き夜激する夫を猫にやり
正夢か出てゆく人の踏む落葉
甘蔗の花ひとりよがりの共白髪
ポインセチア飾りて閉じる修羅の門

二ヵ月前にはじめて自選百句の出稿依頼がきた。驚いたが、手違いに相違ないと「数年後にまわしていただきます」と丁寧にお断わりした。そうしたらまたきた。手違いではないと観念した。荒妙の会費を納めて一〇年余、月に五句、散文的一七文字、をやっとのことで作ってきただけの私である。
合同句集第三号から第七号を拡大コピーして上の余白に春、夏、秋、冬、父、母などと書き、一句づつ切り離してタイトル毎に並べ、一五〇句を捨て、残った一〇〇句をA4版原稿用紙に貼ったのがこの自選百句である。

（二〇〇一年八月号）

当世相談事情

毛利　まさよ

法律相談から子育て相談まで何でも相談できる便利な世の中になった。知らない人に電話で相談することにためらいを覚える中年以上の世代もいるが、若い世代では電話は身体の一部となっている。自分で考えるのは面倒だと電話で回答や指示を求めてくるのである。いくつかを例示してみる。

例一「あまり親しくしていない兄嫁の母が亡くなった。葬儀に出席すべきかどうか。」（あなたとお兄さんとの今後の関係もあるでしょうから、事情をよく知るあなたの周囲の人に相談して下さい。）

例二「何もやる気がしない。どうしたらいいか。」（やる気がないのに無理してする必要はありません。）「それでは解決にならない。わたしは困っていてどうしたらよいか、答えを求めているのに。」（あなたは本来真面目だからやる気のない自分を責めてしまうのです。やろうと思っても出来ない自分を認め、焦らずに労って下さい。）

例三「夫の不倫相手から慰謝料を取りたい。離婚はしない」（不倫だけでは相手だけが悪いことにはなりません。相手もあなたの夫に慰謝料を請求出来ますので、調停に出しても相殺でゼロの可能性があります。離婚調停であれば夫から慰謝料取れるでしょう。）

手にずしり平穏伝え梨届く
秋の蚊の鈍きを仕留めうろたえる
タクシーを駆りてすすきの波に乗る
荒焼に冬陽を入れて陶器市
ベルケトル切り裂いてみる長き夜
晒されし記憶の一点ポインセチア
基地ありてこの子らもありクリスマス
プチピアス年越す事件の妻細し
法廷は化石となりて冬入日
パーマかけ師走の街へ追いつきぬ
大壺に完済祝う苔の松
つごもりて針足長きまつりぐけ
返し針行きつ戻りつ年送る
雲に浮きチェリーブランデー去年今年
戻り来る血の気じんじん花の冷え
戻り寒コピーの余熱伝えたし
小寒の基地にふるえる日章旗
大寒や地元見捨てる観光バス
底冷えにバリウムころころ台の上
遺跡堀る女古代の日向ぼこ
比謝の里深き緑に母捨てる
うば捨ての罪に灼かれる白き道
返り見る母臥すホーム伊集の里

旧盆や母は廊下に車椅子
初叱り失禁の母抱きしめる
口すぼめ紅受く母よ花衣
花冷えを車椅子ごと抱きしめる
雛乱れ母の呂律の定まらず
さらさらといのち涸れゆく月の夜
秋澄むや銘苅の天女昇天す
庭亀の弔問に来る秋の通夜
九十の手妻の冬着に名前書く
母呆けて無言の熱燗父九十
賀客待つ明治の人の背すじ伸ぶ
九十翁千両を背に座を統べる
生命のしかと咳込む春の闇
針痕の紫斑見つめて二月尽
精根の細りて廊下寒走る
春待ちつ空に舞う手の乾きゆく
春の気に息の吸われて止まりけり
春の朝九十三帳完結す
目礼の語る重さや春の葬
熱燗や絶版辞書に父の遺志
授かりてプールにはじける忘りんぐわ
買いかぶる子がいてビール腑に至る
少年は兄のコロンで脱皮せり

からすみをあぶる手加減母遠し
母色のすもも掌中に温める

（二〇〇一年三月号）

〈私の自選百句〉

修羅の門

毛利　まさよ

幸せかと尋ねる人ある春の暮
チェーホフの園をめざして春の汗
葉桜の手鏡に映えシミゆるむ
葉桜の下で待つバス来ないバス
春雷や顔見合わせる人居らず
パンジーの四角に咲きてまつり後
チヤキリスの踊りこぼれて島すみれ
来年は来ぬ道でいごそっと踏む
梅雨冷えにキングスクール戦後閉じ
梅雨冷えやラピスの首輪につながれる
梅雨明けて牛脂の匂いハイヌーン
だしジャコの銀鱗踊る梅雨籠り
抗議きく夾竹桃は基地の中
ギタラ岩真南風吹く時対峙する
王の道野牡丹ひそと松に添う
触診は記憶のひだの夏に触れ
蝉時雨投票箱にすだき入る
親権を争う母の夏化粧
エイサーをソウルでキャッチ黒い汗
上布着て基地のパーティ乗り込めり
油照り火炎放射でバスを撃つ
延命を断わり出れば灼地獄
障害の子逝きて安堵の涙汗
オクラの毛戻る記憶を切りきざむ
老学者木陰で守る村祭り
風死して栗毛の神女生まれけり
毛根まで暴かれており台風過
ワープロの文字流れゆき月渡る
ワンタッチ消えしページや無月なり
ムーンビュー英語で愛でる月同じ
門番は落葉も排除領事館
寝室にバッハを充たす秋の夜半
お嬢様なりし日ありて銀座の秋
大皿の緑釉に新涼のせてみる
新涼や三角むすび端正に
子ひとりブリの照り焼親の不和
ひとり膳秋刀魚一匹はみ出せり

父と母の歴史

毛　利　まさよ

母は大正元年に現在の新都心の銘苅で下級士族の家に生まれた。安里初等学校の卒業証書には氏名の上に士族と書かれている。幼くして実母と死別した母は厳しい継母に仕えつつ長女としての役割を果たした。教員であった母の両親は明治政府の台湾同化政策の担い手として台湾へ渡り、母は台北一高女を昭和六年に卒業している。卒業後は三井物産台北支店で今風の表現をするとＯＬとしていた。時を同じくして台湾にいた父の姉夫婦が心根やさしく忍耐強い母をぜひ弟の嫁にと請うた。昭和十年母はひとり船に乗り未だ見ぬ父のいる東京へと旅立った。

父は明治三十四年伊是名村で生まれた。沖縄師範学校在学中に学級日誌で校長の学校経営を批判して退学処分となり、新天地アメリカを目指して旅立った。甲板員として外航船にもぐり込みアメリカを目前にしたメキシコでマラリアに罹り日赤病院入院中に船は出航、はからずもその後十四年現地に滞在することになった。もともとジャーナリスト志望であった父は日本語の「日墨新聞」を創刊するなど現地の日系人社会で活躍した。長男として帰国のタイミングを窺っていた父はコロンビアが日本に公使館を開設することを知り、これをチャンスととらえた。昭和九年横浜に下船したその足で帝国ホテルにコロンビア公使を訪ね、通訳兼秘書官として即採用された。

昭和十年父と母は東京で結婚したが、父が召集されたため母は東京でもＯＬを続け丸ノ内の満鉄本社へ着物や洋服で通っていた。やがて私が生まれ妹が生まれた。沖縄の親戚縁者の若者たちが勉学や就職のためつぎつぎに上京してきた。

昭和十七年ドゴールが総監をしていた仏領インドシナのサイゴン市で日本が主導する大東亜博覧会（国際見本市）が開催され、父は日本事務局次長として六ヵ月間現地に勤務した。

戦局が緊迫し祖母と私を疎開させたが父と母は東京に残り、昭和二十年三月東京大空襲のまっただ中で三女が生まれた。戦後はまた多くの親類縁者がわが家に転がり込んできた。父は鹿児島から島伝いに漁船を調達して密航し沖縄の様子を見てきた後引き揚げを決意、昭和二十二年末最後の引き揚げ船で家財道具一切を持って帰ってきた。ほとんどの引揚者が着のみ着のままであったが、父は事前調査により持てるものはすべて持っていくことを決意、食器、着物から雛人形まで持ってインヌミのキャンプに辿り着いた。これらのものが殺伐とした戦後の生活に彩りを添えたことは言うまでもない。

父は六年前に母は昨秋他界した。時代のせいとは言え父と母の波乱に富んだ人生を羨ましいとも思う。

九十翁千両を背に座を統べる

熱燗や絶版辞書に父の遺志

追悼―今月の一句から

見守るはいのちの時計月高し

まさよ

十二月号の「荒妙集」の選句はすでに十一月の二十日すぎ「荒妙」十二月号ができた直後にすませてあった。掲出の句はその時の選からもれた一句である。そして今月になって「通信互選」の清記をしながら、再びこの句に出会って大きな衝撃を受けた。やさしく平明な言葉で大変なことが詠み込まれていることに気付いたからである。

そこで、まさよさんの作品を調べ直してみたら、他に「母のこと国際電話月経由」「点滴の針戸惑はす秋の風」「父頼み母を送らん神無月」「さらさらといのち涸れゆく月の夜」の同時作が投句されていた。そしてさらに由美さんの句にも「母危篤思案の夜や秋蚊打つ」「死の近しオイルマッサージの秋夜長」のような句が並んでいた。お母さんが亡くなられたのである。

以上のことからその事実がわかると、冒頭の句の中七「いのちの時計」の比喩はのっぴきならない場面に直面しての心情を吐露したものであることがわかる。その事を深く感情を露出させることなく抑えて表現しているところから、むしろジーンとした悲しさが伝わってくる。まさよさんのお人柄や生き方までが見えてくる。上五の「見守る」という措辞はやさしく、下五の「月高し」にも亡き母への思いやりがあって一句全体をひきしめて動かない。また同時作の「月の夜」の作、「さらさらといのち涸れゆく」も見逃してしまったがなかなか象徴化の効いた作品だと思われる。感情移入がむしろ抑えられていて先にあげた句と手法的には似ているであろう。選句の甘さをつくづくと痛感させられたことであった。

ところで最近会員の身内の方のご逝去が相次いでいるが、荒妙誌として対応できないでいることを心苦しく、責任者として申し訳なく思っている。言い訳けになるけれども、朝七時前に家を出て七時すぎに帰宅する生活をくり返していて、新聞を見ない日も多く、忙しさにまぎれつい見落してしまったり忘れたりすることがたびたびである。個人的に連絡を受けたもの以外はわからないまま通りすぎてしまって失礼をくり返していてお詫びを申し上げます。あとになって句稿から知ることもあり、全くわからないままでいることもある。

今年になって、浜村啓子さん、大城富子さん、伊集紀美子さん、岸本武子さん、そして平田まさよ、由美さん、島袋広美さんのそれぞれお母さんが御他界されたことがわかりました。あらためて会員の皆様とともに追悼の意を表しますとともに御冥福をお祈り申し上げます。あるいはまだ他にもおられるのではと気になりますが、もし抜けていたとすれば情報の不足や記憶ちがいもありますので、どうか御寛恕のほどよろしくお願い申し上げます。併せて失礼の段御容赦下さい。

二〇〇〇年十二月十八日

（玉城　一香）

然のように広い世界へと巣立っていった。一七歳の若鳥を送り出してから二年、電話と手紙から想像する成長をこの目で確かめに行くために、五百円玉の缶を開けた。

子に会わむ貯めしコインの四月旅

まだ少年の面影を残しながら、ハワイの観光産業最前線で働くプロの顔となった一九歳は、まるで空港で働く人みんなを知っているかのように、日本語と英語で声をかけながら雑踏を手際よくさばいていた。ミニバイクを買う、買わないで母と言い争った三年前の少年は、リムジンを運転する立派な青年になっていた。

小学一年から九年間辛うじて籍だけ置いていた公文は、履歴書上日本人を顧客とする旅行社やホテルで高く評価され、よい仕事につくことができたそうである。ハワイに来て最も変わったことは、日本語が上手になったことである。沖縄で方言混じりの友だち言葉を使っていた少年は、日英両語を自由にあやつる観光業界の戦士となっていた。

観光を唯一の産業とするハワイでは、観光業に従事する人をとても大事にする。外貨交換では一セント有利にレストランでの割引など、地元では観光業に従事する個人とのつながりを大切にしている。あるレストランで、息子がいつも上客を連れてきてくれるからお母さんを歓迎したいと、豪華な食事を全部タダにしてくれた。日本で考えられないことである。こんな場合普通以上のチップを置くこともまた常識であるという。

街の背後に山のあるハワイでは、通り雨のようにシャワーがある。山の方ではいつも雨が降っていて虹がかかっている。

通り雨ワイキキの街さまよいて

この街の虹のふもとに子ら生きる

買い被る子がいてビール腑に至る

中学生になったある夏、帰省中の兄のコロンのむせ返る香りを浴びて、少年は青年へと船出していった。

少年は兄のコロンで脱皮せり

育ち盛りの子どもとの接点は食べ物だけである。食べさせながら友人のこと、遊びのことなどの情報を、さり気なく聞き出す高度技術も身につけた。

ゴーヤーが食べられるよとバイト終え

母がなぜいつまでも、つまらない線香花火をなつかしがるのか、子どもには理解できない。

大き子と遊ぶあてなき花火買う

パトカーのサイレンにとび起き、玄関へ靴を見に行く。十代の子を持つ親が皆、経験することである。親が子に望むことはただひとつ、「ノーが言えること」

熱帯夜信頼してるという子あり

巣立ちに備えてもっと沖縄のことを教えておきたい、と母はあせる。ある日食べ物にかこつけて、器を見に行くことに成功した。

子と巡る壺屋の小春もっと春

若武者十八歳、巣立ちの日、送る言葉はただひとつ「信頼して応援してる」。

巣立つ子の銀の翼は真南風天

手紙と国際電話で親は太平洋を手繰り寄せようとする。子はさらに遠方への夢を語る。

留守電のハッピーバースデイ月と聴く

付録は大きくなって本誌をこえ、太平洋の彼方で苦労している。フロクがんばれ。

ハワイの旅

毛利　まさよ

太平洋プレートに乗ったハワイ諸島は、プレートが日本近海でユーラシアプレートの下にもぐり込むため、年間数センチづ日本に引き寄せられているという。他の人には何の意味もない話かも知れないが、私にとっては考える度に自然に微笑みたくなるうれしい話である。ふたりの息子のいるハワイが私のいる沖縄に少しづつ近づいている、という紛れもない科学的事実は私をハッピーな気分にする。

最近パラサイト（寄生虫）シングルという言葉を知った。高学歴、高収入の独身者が親と同居し、食住は親に頼り給料は衣と旅行などに使う、いわゆるリッチな独身貴族を指す言葉だそうである。言い得て妙というところか。女性に多いが男性にも少なくないとのことである。この階層が未婚、非婚となり出生率の低下につながっているとのことである。

欧米では高校卒業後は、精神的、経済的に自立するのが当然とされる。末の息子も高校を出ると親の不安をよそに、当

はなかった。面接は沖縄に帰ってきてからで、確か崇元寺石門の向かいにあった人事委員会の二階で行われた。質問の中に「世界の人口？」があり、答えに詰まってしまった。これで採用はないと思いつつ階段を下りて帰った。

一月ほどして思いがけず、上訴裁判所に面接に来るようにとの通知があった。二二歳の私には裁判所が魅力ある職場とは映らず、このせっかくのチャンスに背を向けてしまった。学校卒業後の最初の選択が、その後の人生のさまざまな選択の方向を決定づけてしまったようである。私の選択はいつも、より経済的に恵まれない方へ、より難儀をする方へと引き寄せられて行ったと妹は評している。

比較的早い時点で、宮仕えをしないという精神的時間的自由と経済的安定保障を天秤にかけ、若気の至りで自由を選択してしまったことで、一生後遺症を引きずって生きてゆかなければならない羽目に陥っている。自分の蒔いた種である。

福祉と英語という二足の草鞋を、一足に組み合わせたりしながら、経済的には苦しくとも、比較的満足度の高い仕事をして来たという自負はある。名刺や肩書に頼らず、定年のない仕事はライフワークとして一生やってゆける利点もある。

那覇高校一一期生は卯年の今年還暦を迎え、久しぶりに同期会を開催した。戦後最初の小学一年生は事務局の予想をはるかに上回る二〇〇人が参集した。兎と亀の競争は、古い価値観ではコンスタントペースの亀が良いとされてきた。しかし今や個性の時代である。走りたい時には走り、眠たい時には寝て、ゴールには着きたい時に着けば良いし、途中棄権も悪くない。これからもマイペースで生きたい。（蛇足・英日翻訳引受ます）

熱帯夜訳語さがして辞書三つ　　まさよ

（一九九八年八月号）

子育て完了記

毛利　まさよ

全く俳句を作ったこともない者が、安易な気持ちで荒妙の会員になり、最初の頃に投句した思い出の句がある。上の子から十二年ぶりに思いがけず授かった次男は、四十歳の母親には戸惑いながらも、嬉しく誇らしい宝物であった。

授かりてプールにはじける忘りん子

幼い息子を連れて外出するとよく人を戸惑わせた。「お孫さんですか、それとも…」。人を困らせないために、口ごもる相手の先手をとって、「これ、人生の付録です」と言った。人の視線をあびてサービス精神を身につけた息子は、聞かれる前に「ぼくお母さんのフロクだよ」と言うようになった。

良き付録つきて人生日差し伸ぶ

「どうしてビール飲むの？」「頭が良くなるからよ」「だからお母さん何でも知ってるんだね」「オブコース」

復帰に伴い一国一代表部の原則から、東京の日本代表部が残り、沖縄は消滅することになったが、広大な米軍基地をかかえ国際福祉へのニードは高まるばかりであった。一九七二年相談機能の継続を図るため、社会福祉法人として衣替えした。

一九七九年国際児童年に、沖縄の無国籍児問題を訴えて大きな反響を呼んだ。国籍法の父系優先主義が男女平等の原則に反するとして女性団体が運動を展開、一九八四年の国籍法改正の推進力となった。法改正により晴れて日本国籍を得た無国籍児の数は七〇人以上であった。

戦後長い間金網を隔ててアメリカ軍と相対し、交流してきた沖縄では、国際福祉相談といえば基地と沖縄との間の問題であった。しかしこれからは、多言語による福祉相談が求められているのである。諸般の事情により国際福祉相談所は一九九八年三月、その四〇年の歴史に幕を降ろした。

この四〇年間に取扱ったケースは一万五千件、戦後沖縄の置かれた特殊事情の嵐に翻弄された人と子の数であり、人種、国籍、言語、文化の壁を自らの力で乗り越え、人生を切り開いて行った人の数である。

基地ありてこの子らもありクリスマス

復帰の日黒人兵の子は赤子

貼り紙で戦後を閉じる年度末

（一九九二年二月号）

遠景近景

会員紹介

毛利まさよ（本名　平田　正代）

生年月日　一九三九年十一月六日（五十九歳）

所属結社　なし

師の好きな一句

戦後といふ分母もちわれらビール干す　一香

好きな自作句

授かりてプールにはじける忘りん子　まさよ

六〇年安保を経験しなければ、今とはかなり違う人生を歩んでいたことは確実である。安保闘争を通して、情報を取捨選択し、考え、判断し、行動し、責任をとることを学んだ。デモで国会周辺を歩き回ったせいだけではないが、自分の足をしっかりと地につけて生きる感覚を体得したと思っている。

一九六二年の卒業を前に、東京で琉球政府上級公務員試験を受けた。地域社会と直接関わる仕事をしたいと考えていたが、公務員になりたいという明確な目的を持っていたわけで

ヤードイの収容所へ送られ、昭和二十四年には那覇の大道小学校近くに落ち着いた。あの時代に転々と運ばれ、無事荷物が沖縄に届いただけでも本当に幸運なことであった。この雛人形は親たちにとっても思い入れの深いものであったに違いない。

長旅で欠けたり壊れたりはしていたが昭和二十五年の三月、食べるものも十分にない中で母と娘はお雛様を飾った。首が傾げたり、鼻が欠けたりもあったが、一応の体裁は整った。先生がこのことを知り、クラス単位で全校生徒が見学に来た。お雛様見学はその後数年続いた。

ほとんどの生徒にとってこれがお雛様との最初の出会いで、かなり印象に残っているようである。四十五年経ったいまでもクラス会で話題にのぼったりする。三人官女が二人になったり、五人囃子が四人になったりしながら人形は最後の務めを果たした。

肌が白く冷たい日本人形が壊れたり、髪が乱れたりすると気色の良いものではないし、見るに忍びない。今になって一体くらいは残しておいても良かったのにと悔やまれるが後の祭りである。

お雛様を出す時のぞくぞくした期待、しまう時に和紙で部分部分を丁寧に包み託した再会の願い、母の話す古典文学に想像力を膨らませたこと、雛人形に母の面影が重なる。

母童女雛を飾りしセピアの日

早よ惚けて母と遊ばむ雛祭り

（一九九五年十月号）

ひとつの戦後のおわり

毛利　まさよ

国際交流とは文化や技術それ自体が交流するのではなく、感情を持った人間が交流することによって、文化や技術が交流されるのである。感情交流の結果を好ましい、好ましくないなどと批判するのは筋違いであろう。結果は変えられないが、それをどう受け取り、どう対応し、どう活かしていくかによって、その後の人生にそれぞれ異なった意味を持つものである。

スイスに本部をおく国連の外郭団体国際社会事業団が、沖縄に代表部を開設したのが一九五八年、混血児の養子縁組や国際結婚、内縁関係など米軍基地から派生する問題への対処、援助が目的であった。一九六七年までアメリカ人の事務局長が派遣されて来ており、当時から欧米スタンダードのソーシャルワークが日英両語で行われていた。

理事会は日米双方で構成され、それぞれの側から理事長を出す共同理事長制をとっていた。従って議事は日英両語で進行、資料も両語で用意するという大変な手間をかけて、民主主義の実践という大義名分が守られていた。

ひとり膳秋刀魚一匹はみ出せり

「はみ出せり」作者のやるせない思いが十分に表現されており、しかもそれを〝もの〟に託してあるだけに説得力がある。上五との言葉のひびきあいの中から余韻が広がってくる。

（一九九三年三月号）

「ハワイアンブルー」

毛利　まさよ

「復帰」とは教えるものとなりにけり
大寒やインコ汚れてうづくまる
冷房のデンタルチェアーに死体めく
沈黙の相談室や山つつじ

「復帰」の句、まさに実感ありの句だが、復帰だけで季語になるのだろうか、復帰の日なら問題ないが、ハワイアンブルー、熱低、世紀越すなど季語として了解してよいものか迷った。

大寒の句、寒、汚れ、うづくまるとすべてマイナスの要素で一句を仕立てているが、それがインコに対する哀れさを示した。

冷房の句デンタルチェアーに掛けているその事を死体めくと把えたのはなかなかの発見だと思う。しかし冷房のとなるとデンタルチェアーだけが冷房されているということなので、ここは冷房とした方が冷房の部屋とその中の身体が照応されて死体めくという措辞が生きるのではないだろうか。

沈黙の句、ケースワーカーという職業柄いろいろな相談を受けるのだろう。山つつじの明るさが沈黙ののちの相談の成果を思わせて安堵する。

（二〇〇三年十月号）

雛人形

毛利　まさよ

荒妙の戦後五十年特集は、私の記憶の底に薄く静かに沈んでいて自分でもあまり自覚することのなかったよどみに竿をさし、いったん舞い上がったよどみは決して元に戻ることなく、記憶の池全体に広がり今もふわふわと漂い続けている。そのふわふわのベールの奥に見えるのが雛人形たちである。

昭和十五年の初節句に親は身分不相応なほど立派な段飾りの雛人形を、はじめての子である私のために買った。端正で上品な顔立ちの人形と、細部まで丁寧に作られた調度品や道具のひとつびとつが触感とともに記憶に鮮明である。

雛人形とは見る、見せるだけのものではなく、取り出して飾る、しまうの部分が大切なのである。私の雛人形は首と胴体が別々で、それぞれの人形のかぶりものや持ち物を覚えておいて、正しい身仕度を整えてやらねばならなかった。

季節が回ってくると人形との再会に胸踊らせながら押入の奥の大きな箱を出し、ナフタリンの匂いとともに和紙にくるまれた人形を取り出す。懐かしい小さな顔が無事に次々と現われる。母と娘の毎年同じかもしれないお雛様の話が続く中で、お内裏様の帽子の紐が結ばれ、お姫様が扇を持ち、五人囃子が楽器を構える。

東京で戦災を免れた雛人形は最後の引き揚げ船でインヌミ

を、一日千秋の思いで二階の窓から待ち続けた。秩父では蒸かしたさつま芋をスライスして天火に干す干芋作りに、祖母は居候として精を出した。干芋には独特の匂いがあり、私は幼さを武器に干芋を食べないことで現状に抵抗した。そのことが父や祖母を窮地に追い込んだことなど知る由もなかった。

やがて私たちは鶴見に移された。男達は工場で働き住宅はその郊外にあったようで、田園風景の中でニラを摘んだ記憶がその匂いとともに残っている。製粉所から皮も挽き込んだフスマなるざらざらの粉を買い、ニラを入れたヒラヤーチーを作って食べた。畦道で空襲警報のサイレンを聞いた時は、その場で頭隠して尻隠さずの姿勢を取った。

終戦となりようやく東京の両親のもとへ帰って行って間もなく、昭和通りを大きなトラックが轟音をたてて次から次へ通り過ぎるのに遭遇した。大人達は立ち止まって見物するでもなく、いたって無関心のように見受けられた。母に尋ねるとそれは進駐車であり、乗っているのはアメリカ兵とのことであった。私はアメリカ兵が自分たちと同じ人間であることに驚いた。それまで大人の会話から「キチクベイエイ」とは何か漠然と怪獣のようなものと思い込んでいたからである。

同じ人間という安堵感は五才の心に大きな安心となって錨を降ろした。私は今もその錨でバランスを保っているのである。疎開を二度経験したことで大人の心理を読み取る術を体得し、それが後に、試験の出題傾向を予測するのに大いに役立ったのではないかと思われる。

（一九九五年六月号）

夏おんな

毛利　まさよ

生きてます女とビール相性よく
夏の講若き教授の光源氏
タクシーにオペラ流れて汗止まる
異議なしの株主総会土産あり
汗引けば天ぷらそばを再決断
男性学聞きて熟女の暑気払い
夏おんな男社会は世紀末
ワープロのリボン換えよと夜の蝉
熱低の雲に追われる月歪つ
今は昔独立記念日祝いし日
パリ祭や第二外国語呼び戻す
パリ祭やシャンソンにある学生時代
冷房に陶器の肌はきめ細か
投票場パラソル置いて息をつく
蝉時雨投票箱にすだき入る

（一九九八年九月号）

若葉の光りの中での薫風の味わい。まるで田舎の生活リズムの心豊かな自然体の生活が伺える。句意は別段難しいものではない。読んでその通りの意味だと思う。しかし、その風景の中に我々が昔や田舎で味わった通りの体験が再現される思いである。でも、何時間待たされても、特に苦痛になるような事はなかった。しかし、今では少しの時間を待つのも苦痛を感じる。

しかし、季語の拡がりを受けて、「待つバス来ないバス」のリズムが心のリズムを軽快にしている。

（当真針魚）

（一九九七年八月号）

毛利　まさよ

「エンプティ・ネスト」

遺跡掘る女古代の日向ぼこ

土笑う発掘現場春隣り

ワンタッチ消えしページや無月なり

ひとり膳秋刀魚一匹はみ出せり

熱燗や絶版辞書に父の遺志

作品に、外来語が多用されているのが特徴である。ここでは、日本語化した語であり、また、語の原義を熟知したうえで使用されているので問題はない。一般的には、ぎりぎりまで切りつめた表現の中に、意味の伝達力の弱い外国語を使用するには、慎重でなければならないであろう。第五句は、古い絶版となった辞書に、亡き父の言葉を見つけ感慨にふけっているというのが句意で、省略の効いた佳句であり、季語も動かない。

（一九九九年十一月号）

幼児期の戦中体験

毛利　まさよ

両親が東京で結婚し私は昭和十四年に生まれた。家に同居し幼い私を連れ回って可愛がっていた大学生の従兄が、ある日突然セーラー服を着た黒枠の写真となって帰ってきた。状況判断は当然出来なかったが、家の真ん中に飾られた大きな写真の寂しげな表情は今も私の脳裏に焼き付いたままである。

玄関のすぐ外にかなり本格的な防空壕が掘られ、ちょっとした家財道具も運び込まれていた。空襲警報発令のサイレンが鳴ると防空頭巾を被り、畳半分の蓋を持ち上げて壕に避難した。父はサイレンと同時に地域防衛隊員として出てゆかねばならなかった。蓋の隙間から空を見上げるとB29の大きな機体が編隊を組んで悠々と動いてゆき、その遙か下の方で地上からの高射砲が昼間の花火のように弾けて白煙の魂がポカポカ浮いているのが見えた。夜間には灯火管制があり窓にはそれぞれ工夫した暗幕が張られ、針の先ほどの光も外に洩らしてならなかった。

その後祖母と二人で疎開を二度経験した。埼玉県秩父と神奈川県鶴見の親戚のところであった。食糧難の時代の招かれざる客としての自分の立場は、幼い子供にも容易に認識できた。時々リュックに缶詰などを一杯詰めてやってくる父の姿

はまた同じ帽子を被ってやって来た。帽子がお似合いと話しかけると彼女は涙をこらえながら帽子を脱いで頭をさし出した。そこにある大きな円形脱毛と全体の病的な毛の薄さに私は絶句した。その後の彼女の話は日本人のアジア人に対する蔑視という精神の病巣を断層写真で見せるものであった。外国人を配偶者とした日本人が国粋主義者に豹変するのは、単一民族としての純血を守らなかった者として同胞に感じる負い目から来るのである。

「日本人になりたくなれない日本人」たる沖縄人がアジアの人と文化を蔑視することによって日本人になろうとする時、二重の差別意識が働いていることになる。経済的発展の優越性だけを誇るのをやめよう。身近かにいる外国人に軽い会釈とスマイルを贈ろう。円形脱毛が防げるかもしれない。

秋帽子円形脱毛アジア妻

（一九九四年六月号）

宜野湾　毛　利　まさよ

夢破る正月の無き国のヘリ
抗議聞く夾竹桃は基地の中
エイサーをソウルでキャッチ黒い汗
大旱進んだ女のいるゲート
基地ありてこの子らもありクリスマス

終戦直後の記憶の中の一枚の絵。父の膝に抱かれ風呂を焚く私。側に積まれた書籍。燃やしでのある上質紙の洋書。破り易かったコンサイスの薄紙。火照った五才の頬と焚口だけが鮮やかなレンブラントの父娘。

（一九九五年六月号）

宜野湾　毛　利　まさよ

遺跡掘る女古代の日向ぼこ
ペンタゴン眼下の凍土五角形
口なしや隣の離婚知らぬまま

（一九九七年十二月号）

宜野湾　毛　利　まさよ

花冷えを車椅子ごと抱きしめる
唐突な初恋ばなしチューリップ
長梅雨や工事人形片手振る

（一九九八年十二月号）

葉桜の下で待つバス来ないバス

毛　利　まさよ

冷えたビールを一息に飲む爽快さは、ビール党にとって最大の幸せである。
ところで、仕事に一段落をつけるのは、なかなか容易ではない。ある決心がいる。作者のように「明日は明日」と気軽に構えることが必要だ。
「今日一日よく頑張った。さあ、ビールで乾杯。」今日しめくくる缶ビールに、一日の苦労も吹飛ぶ。至福の一時である。
日常生活の一コマを見事に切り取った作品だと思う。「上五」「中七」の軽やかないいまわしが、季語にすんなり結びついているところが良い。

（仲嶺一壺）

（一九九五年二月号）

一句鑑賞

荒焼に冬陽を入れて陶器市

毛利　まさよ

沖縄の風物詩の一つ―「陶器市」、そのメイン、「荒焼」の壺。これは縄文時代から現代に至るまでの人間の、精一杯で虚飾のない生きざまの象徴。
「冬陽を入れて」という把握は、また、新しい発見。「荒焼」の壺に、命のぬくもりを込めたように思います。「冬陽」とともに造った人、商う人、そして作者の温かな人間味さえ感じさせます。平明な表現の中に、豊かな喚起力を秘めた佳句だと思います。

（押　勇一）

（一九九六年四月号）

アジア妻との出合い

毛利　まさよ

数年前の人権週間に県内で初の試みとして「外国人のための人権相談」が浦添市のショッピングセンターで開設された。法務省職員、弁護士、英語、スペイン語、ポルトガル語の通訳が期待と不安の中で来談者を待ちかまえていた。

戦後この方沖縄で外国人と言えば即アメリカ人であり、それも日米地位協定によって駐留している軍人軍属とその家族を指し、その数約五万人である。それにひきかえ基地と関係なく日本政府より在留許可を得、市町村役所に外国人登録をしている人が約五千人、十分の一に過ぎない。

金網の中で強力な羊飼いアンクルサムに保護され、思いやり予算の恩恵に浴する陽気な羊たちの群に比べ金網の外の少数の羊たちは群をなさず、納税の義務を果しながら権利を主張することもなく、地域社会の中に埋没しひっそりと暮しているのである。陽気な羊たちがはしゃいで問題を起こすと非難の眼は往々にして身近かにいるおとなしい羊に向けられるのである。

人権相談にようやく最初の相談者がやって来た。帽子を被ったアジア人女性で周囲を気にしながら遠慮がちにやって来た。日本人男性と結婚している外国人女性が妻として母としてどの程度の権利を認められているのか知りたいという。回答者は外国人であっても日本人同様の権利があることを通訳を通して懇切丁寧に説明したが、実感として納得がゆかない面持ちであった。相談が終った後で私は彼女に個人的に話しかけ後日会うこととした。数日後待ち合わせの場所に彼女

秋の風心通わぬ異国妻
アジア妻ブーゲンビリヤにとけ込みぬ
ブーゲンビリヤ空をつかみて尚延びる
苅り捨てしブーゲンビリヤに挑まるる
福木の実車道にころげ所在なし
苦菜つみ留守の夕食定まれり
ホーム辞しえのころ草に責めらるる
運動会孝行娘を演じ得ず
手ではかるみかんの甘さ保証付
天高くアメリカ世の名残り旗
アメリカ世なつかしむ声秋の暮

〈私の作句信条〉
この三年間日記がわりに、一月の生活を五句にまとめるだけの投句は、あまりにも散文的断片的十七文字であったことを自覚している。今後は立ち止まって深呼吸をし、周囲を見まわす余裕を持つよう心がけたい。

（一九九三年一月号）

アニバーサリー

毛利　まさよ

銀婚をグラスに満たし秋の宵
ポラロイド四半世紀をくくり得ず
晒されし記憶の一点ポインセチア
許さじの言葉時効に夜更ける
年経ても定まらぬこと空高し
子ふたりひつじ年にて二まわり
取材する子がいて真珠湾五十年

（一九九二年二月号）

修羅の門

毛利　まさよ

正夢か出てゆく人の踏む落葉
感謝祭最後の晩餐ハムを食う
甘蔗の花ひとりよがりの共白髪
断ち切れぬ思いのままにりんごむく
烙印の帯状疱疹年を越す
愛憎を点滅させてクリスマス
ポインセチア飾りて閉じる修羅の門

（一九九四年二月号）

明日は明日今日しめくくる缶ビール

平田　まさよ

天高くアメリカ世の名残り旗

高等弁務官は君臨しなくなったが大きな星条旗はまだ翻っている。向う側のパーティに招かれると着物で文化武装して乗り込むことにしている。

ムーンビュー英語で愛でる月同じ

ボランティア異国のホームの煤払い

欧米の月は人を狂わせるが日本の月は人をやさしくする。ボランティア精神はアメリカ人から受け継いだ大いなる遺産である。

基地ありてこの子らもありクリスマス

両親の良い面だけを持って生まれてきたはずのハーフと呼ばれる子供たちが、二つの国の法律の谷間で不利益を受けてはならない。この子らの持つ大きな可能性の花を開かせ、実を結ばせなければ、戦後のあだ花に終わってしまう。

毛利まさよさんの「基地ありて」を拝読、基地といえば反戦ばかりの句しか頭にありませんでしたが、こんなすばらしい人類愛ともいえる句が生まれうれしくなりました。英語と季語をうまく利用され、「荒妙」に新風を吹きこまれ楽しみにしています。ご精進をお祈りします。

（上江洲萬三郎）

（一九九三年五月号）

〈一日一句〉今月の三十句

「秋」

毛利　まさよ

秋澄む日白磁の皿を買いこみぬ

赤ワインルビーとなりて秋満喫

秋鮭の切身家族にプラスワン

焼さんま家路を急ぐ手に熱し

帰り来て夜食のうどんねぎ多し

特別のコーヒー入れて文化の日

秋の朝人待ち顔にアメリカン

新涼やモーニングサービス面映ゆし

コーヒーと一冊で秋ひとり占め

秋ひと日誰にも言わぬ誕生日

口紅の秋色映えるナルシシズム

秋を知る長袖シルクの肌ざわり

秋曇り使わぬ傘を今日も持つ

意気集う燈下の白髪女性学

秋陽あび停年待たるる人の影

廃車場気負わず守る野朝顔

バス停のカンナに見とれバスを追う

不法投棄カンナ見張りて立ちつく

トボロチの紅を拒みし古き傷

でよいのですと言われた。

素直に表現するということは表現された結果を見れば簡単であるが、大変に難しい。合理主義人間を自認する者は、何事も理由や説明をつけなければ気が済まない。よい俳句をつくるためには理屈をすてて謙虚にならねばならないことを改めて教えられた。人間性を磨かなければよい俳句はできないのだ。

パソコンも単純で素直で謙虚であり分をわきまえている。パソコンを老後の伴侶にすることにより「何もできなくなる」不安を解消した。パソコンで俳句をつくる—これは私の老後のひとつの可能性である。

（一九九二年七月号）

基地ありて

毛利　まさよ

舞台背景は青い大きな平和の海（パシフィックオーシャン）、そのほぼ中央に要石（キーストン）と呼ばれるひとつの島。舞台の中心に金網とゲートがあり、様々な花が咲き乱れている。金網を挟んで人々は時としていがみ合い、また国際親善と称して交流するが、多くの人は自分の生活にかまけて向う側の人のことには無関心である。われわれはこのような舞台装置の中で四十八年間生きてきた。

夢破る正月の無き国のヘリ

初春に肥えた腹見せ軍機飛ぶ

わが家は海兵隊普天間基地の進入路に位置し、轟音と共に飛行機が屋根に着陸せんと襲いかかってくる。そのため防音工事指定を受けいわゆる思いやり予算で、四室を改装しエアコンと換気扇を取りつけてもらった。六〇年安保で反対したはずの日米安保条約は三十年後、わが家に文化的生活をもたらしたのである。

抗議聞く夾竹桃は基地の中

金網を張り替えまたも慰霊の日

夾竹桃は基地側に植えられた義理から、大きく繁茂して期待通りに基地の目かくしの役目を果たすようになった。

うだる基地円飲み込みて祭果つ

大旱進んだ女のいるゲート

強い通貨円を求めて基地が口を大きくあけるのがカーニバルである。人種、国籍、肌の色に偏見を持たない自称「進んだ女」がカタコトの英語で出没するのもこの頃である。

ペイデイの腰と乳房が惜しむ夏

エイサーをソウルでキャッチ黒い汗

アメリカ人は陽気でエネルギッシュ。はちきれんばかりの肉体を惜しげもなく白日にさらす。パーランクーはソウルを揺さぶる。

上布着て基地のパーティ乗り込めり

四十見ぬ君の無念のさそり座よ

事件の年は何事もなかったように暮れ、いつもと同じように新しい年がはじまった。

雲もなく事件年越す基地の島

以上はすべて荒妙に投句したもので、稚拙ではあるが私の事件簿である。壁や金網さえなければこの事件は容易に解決していたであろう。

いつの日か事件が解決し、私の事件簿を完結する句を作りたいと念願している。

（一九九一年九月号）

外人墓地の深みどり

毛利　まさよ

生を受けて半世紀、思うところあってパソコンの手習いをはじめた。突然やってくる身内の老人問題はそれ迄のライフスタイルや人生設計、親族間の人間関係のダイナミックス（力関係）に大きな変化をもたらす。

支えられていた側と支えていた側の地位がある日突然逆転するのである。モデルのない試行錯誤の中で、自分自身の老後を必然的に考えさせられる。痴呆は防ぎようがないし、なってしまえば仕方がないが、意識は正常で身体の自由のきかないのが一番辛い。

少しの筋力しか残っていなくても意志を表現し、創造的活動をするにはコンピューターしかないと思い当った。早速泊高校で週三日パソコン入門講座を受けることになった。

泊でバスを降り、陸橋を渡って健康食品店で玄米ランチを食べ、外人墓地を通って泊大橋に縁どられた港の船の出入りを眺めながら四階の教室へ上り、二時間四角い画面に立ち向うのであった。

帰りは午後の曳航を眺めつつ外人墓地の緑影に一息ついて、北岸構内を通り抜け、ゆったり動く貴婦人のような白いフェリーを横目に龍の橋を渡り、泊港再開発の進展を見ながら港務所前バス停へ出るのがルートであった。

これだけの舞台装置の中を往き来して、俳句が生まれてこないはずはないと思った。しかし感性のアンテナは感度が鈍く、何もできないままに往復だけをくり返していた。時々立止っては五七五の言葉を無理に並べたりして焦りを感じていた。

そんなある夜友人の店で偶然一香先生にお会いした。ビールを傾けつつ泊高校の往復に俳句ができないことを、泡を飛ばしながら一生懸命説明した。先生は俳句は理屈ではなく、見たことを素直に表現することだと言われ、私の説明の言葉そのままに

傘さして外人墓地の深みどり

第2章　俳句・エッセイ

■通信句会誌『荒妙』より■

私の事件簿

毛利　まさよ

あれから二年余、人々の記憶から次第に消えようとしているあの事件は一九八九年五月十七日に起った。

テレビの最終ニュースを何気なく見ていた深夜、突然友人の顔が画面に写し出された。北中城村の住宅街で白昼起った「日本人妻殺人事件」である。生後六ヶ月の次女の目前でのパン切り包丁による犯行、第一発見者が学校から帰宅した十五才の長女、被害者は空手の有段者にもかかわらず抵抗の跡がない等、異常づくめの事件であった。

折りしも私は荒妙に入会を決めたばかりの俳句の初心者で、最初の投句作品を思案している時であった。警察はすぐに被害者の交友関係を洗いはじめ、私は元同僚として連日警察へ呼び出されたり、刑事の訪問を受けることになった。

事件から二週間後カデナ基地内のチャペルで告別式が執り行なわれた。

英語ミサ遺児の笑顔に百合そむく

百合つぼみガムかむ喪主や未解決

状況証拠からして、被疑者をしぼり込むのは時間の問題と思われていた。

七七忌刑事見送るぬる麦茶

しかしながら、日米地位協定という治外法権の金網と言葉の壁とに阻まれて、捜査は遅々として進展しなかった。

真犯人かくれて台風迷走す

移動の激しい軍人軍属の捜査は時間との勝負でもある。しかし待つしかない。

参考人ありときく頃秋に入る

菓子箱を持った刑事を玄関先に見つけ、期待を持って招き入れたが、朗報を持ってきたわけではなかった。

短か日や刑事手土産浮かばれず

三十九才なかばで幼い娘を残して往った友は、私と同じ十一月生まれであった。